

報告書』二二二—二三七頁、国会図書館調査及び立法考査局。

日本鯨類研究所 一九九七『日本鯨類研究所十年誌』。

浜本端 一九九六「差異のとらえかた——相対主義と普遍主義」『思想化される周辺世界』(岩波講座 文化人類学 第一二巻)、  
六九—九六頁、岩波書店。

フリーマン、ミルトン 一九八九「くじらの文化人類学——日本の小型沿岸捕鯨」高橋順一他訳、海鳴社。

松田素一 二〇一三「現代世界における人類学実践の困難と可能性」『文化人類学』七八(一)、一—一三頁。

◎英語

Akinichi, Tomoya, Pamela J. Asquith, Harumi Befu, Theodore C. Bestor, Stephen R. Braund, Milton M. R. Freeman, Helen  
Hardacre, Masami Iwasaki, Arne Kalland, Lenore Manderson, Brian D. A. Moeran and Junichi Takahashi. 1988. *Small-type  
Coastal Whaling in Japan: Report of an International Workshop*. Boreal Institute for Northern Studies.

Goodman, Dan. 2011. The Future of the IWC: Why the Initiative to Save the International Whaling Commission Failed. *Journal of  
International Wildlife Law & Policy* 13 (1): 63-74.

—— 2013. Japanese Whaling and International Politics. *Senri Ethnological Studies* 84: 325-335.

Kuwayama, Takami. 2011. Anthropological Reflections on Cultural Relativism. *Proceedings of the 1st World Humanities Forum*,  
pp. 74-85. UNESCO.

The Government of Japan. 1997. *Papers on Japanese Small-type Coastal Whaling: Submitted by the Government of Japan to the  
International Whaling Commission 1986-1996*.

## 第Ⅱ部 英語圏民俗学の日本研究

第二部は昔豊による第九章「日本」民俗学以前の事」だけから成る。本章で特筆すべきは、(一)柳田國男(一八七五—一九六二)が生まれる二年前の一八七三(明治六)年には、民俗学発祥の地イギリスにおいて日本の習慣が *customs* (民俗) という新語を使って描かれていたこと、(二)一八七八年にイギリス民俗学会が設立された際、一人のロンドン在住の日本人と二人の東京在住のイギリス人が会員として名を連ねたこと、(三)上記イギリス人の一人チャールズ・フオンデス(*Charles Proudes*)が、同学会のジャーナルの創刊号で日本の昔話を一点一点も紹介したり、研究集会に積極的に参加したり、また日本で最初に *Folklore* の語を使用したりするなど、日本研究を専門とする最初のフォークロリストとして活躍したこと、(四)さらに、明治初期の著名なジャパノロジストたちがイギリス民俗学会と密接な関わりを持っていたこと、等々の事実の詳細が初めて明らかにされたことである。

日本民俗学の「正統な」学説史では、同分野の起源は柳田國男に求められることが多い。たとえ江戸時代に遡ったとしても、菅江真澄(一八二九年没)らの日本人の名前が挙がるだけで(福田二〇〇九)、外国人研究者との関連が問われることはまずない。せいぜい、フォークロアという語を日本で紹介した人物の一人として、アイヌ語辞書を編纂したイギリス聖公会の牧師ジョン・バチエラー(*John Batchelor*)が軽く言及される程度である。だが昔によれば、日本の民俗の研究は既に柳

田が生まれる前にイギリスの地で始まっていたのである。驚くべきは、こうした事実を日本の民俗学者はほとんど知らない——知らないで済ませてきた——ということである。この意味で、第九章は柳田中心のドメスティックな日本民俗学史観への挑戦であり、民俗学発展史の世界的潮流のなかに日本を位置づける斬新な試みである。<sup>\*</sup>

ここで、本書の編者として二点ほど付け加えておきたい。第一点は、アイヌに関わることである。柳田は沖繩を日本文化の原型と捉え、遺作『海上の道』に明らかのように、最後まで南方の島々に情熱を注いだ。北方の島々にはきわめて冷淡であった。また、「旅する巨人」として知られた宮本常一も、北海道では「西方の人」として「己の本質的限界を感じた」といわれる(佐野 二〇〇一: 一三二—一三三)。そのような先達の姿を見て、後学の徒は北海道なんかなくアイヌの研究を怠ってきたといつてよい。だが、海外の人類学的・民俗学的日本研究からすると、これは非常に残念な結果をもたらした。なぜなら、第六章で見たように、世界的にアイヌほど西洋人研究者の注目を集めた民族も少なかったからであり、事実、バジル・チェンバレン(*Basil Chamberlain*)の *Aino Folk-Tales* (2008 [1888]) は、アイヌの民話を直接扱った作品である。この本には「人類学の父」エドワード・タイラー(*Edward Tylor*)の序文がついていて、人類学者にとつてはそれだけで感慨深いものがあるが、日本と西洋の民俗学が接点を失った一つの原因は、言語学者にして民俗学者でもあった金田一京助や、彼のもとで学んだアイヌ民族出身の知里真志保らの仕事を受け継ぐ者がなく、一部の例外を除いて事実上アイヌ研究を放棄してしまったことにあるのではないかと思う。

第二は、「二つのミンゾクガク」という伝統についてである。文化人類学がまだ「民族学」(*ethnology*)と呼ばれていた頃、日本の民俗学者は西洋ではあまり行われていない親族や村落——イエとムラ——の研究を積極的に行った。そのため、文化人類学との接点が増えたのである。また、

先進西洋諸国から遅れて近代化した日本では、都市と農村の乖離が激しかったため、田舎を訪れた都会の人類学者はそこに異文化に近いものを見た。それは彼らを自然と日本研究へと導いた。つまり、双方からの働きかけによって、日本では民族学（文化人類学）と民俗学が手を携えて発展したといえよう。「二つのミンゾクガク」と親しみをもって呼ばれた所以である。

だが、海外調査費用の調達が可能になった一九六〇年代頃から、元来、異文化に関心の強い人類学者の心は日本を離れていった。そして、理論的洗練度を深めて学界での地位を固めていった。対照的に、「野の学問」を標榜してきた民俗学は「学」としての発展が不十分で、一般読者の間では根強い人気を保ったものの、国内外の学界から孤立していった。こうした事情のもと、両者はいっのまにか袂を分ってしまったのである。

しかし現在、事情は再び変わってきているように思われる。文化人類学は異文化を扱い、民俗学は自文化を扱うという従来の「棲み分け」が、だんだん崩れているからである。文化人類学側の要因としては、グローバル化の進展によって日本の（多民族化とはいわずとも）民族的構成が複雑になり、国内に新たなフィールドが登場したことが掲げられる。民俗学側の要因としては、一九七〇年代以降、柳田の「一国民俗学」の呪縛から解放されるようにして、異文化研究——その対象の多くは東アジアであった——を行うようになった。竹田且の一連の著作（竹田 一九八三、一九九〇、一九九五など）は、そのようにして登場した日韓比較民俗学の先駆けである。さらに、近年の「日常」に対する若手民俗学者の関心が示すように（門田 二〇一四）、扱うテーマも人類学と近似してきた。研究対象およびフィールドワークを基本に据えた方法論という観点からすると、両者を明確に分けるものはもう多くないのである。同様の事情は海外にもあるようで、たとえばイギリスでは二〇一五年一〇月、ロンドンの王立人類学協会で「民俗学と人類学」というシンポジウムが開催された。

第二部に収録された昔の長大な論考は、以上の問題を考えるうえでも一つの契機となるであろう。編者としてはそれを期待している。

#### 註

\*1 イギリスの日本研究の泰斗ジョイ・ヘンドリー (Joy Henry) は、昔が第九章で取り上げたチェンバレン、アストン、パチュラー、サトウらの著作を大体読んでいることである。さすがにフォンデスのことは知らなかったが、チェンバレンらの著作は後の人類学的日本研究の素養として大変興味深いものであり、なによりも読んでいて楽しいという（二〇一五年七月、私信）。おそらく、英語圏の学者にとっても、明治初期の日本を描いた「民俗誌」は、現代日本研究のマザー・グース（子どもに読み聞かす童謡集）のようなものだろう。

#### 参考文献

- 門田岳久 二〇一四「民俗から人間へ」門田岳久・室井康成編『人』に「向きあう民俗学」森話社、八―三九頁。  
佐野眞一 二〇〇一『宮本常一が見た日本』NHK出版。  
竹田且 一九八三『木の雁——韓国の人と家』サイエンス社。  
—— 一九九〇『祖霊祭祀と死霊結婚——日韓比較民俗学の試み』人文書院。  
—— 一九九五『祖先崇拜の比較民俗学——日韓両国における祖先祭祀と社会』吉川弘文館。  
福田アジオ 二〇〇九『日本の民俗学——「野」の学問の二〇〇年』吉川弘文館。  
Chamberlain, Basil H. 2008. *Aino Folk-Tales*. Bihobobazaar. (Orig. 1888).

## 第九章 「日本」民俗学以前の事

一九世紀イギリスにおける folklore の誕生と日本

菅 豊

### 一、はじめに——民俗「学史」の構築

「学史」とは、学問の歴史である。学問のそれぞれの個別分野（ディシプリン）には、知識や学説、方法論、データ収集法、表現技法などの体系化や、その担い手の組織化、そして社会のなかでの受容を含めた制度化などに関する、固有の発展の歴史<sup>11</sup>学史がある。自己が依って立つ、あるいは自分の専門と称する学問分野の学史を最低限知することは、研究者にとって必須である。しかし学史が歴史であるかぎり、それは構築性といった歴史の本源の、宿命的性格から逃れることはできない。そして、その構築される歴史は多面的であり、学史の叙述者ごとに、いくつもの学史を描くことが可能である。

学史の叙述は、学問分野の思想や理論、方法論、技法、研究内容の発展過程の客観的な俯瞰や解説ではない。学史の叙述内容、そして叙述の力点は、その叙述者の立ち位置や関心に大きく左右される。学史を叙述することは、その

叙述者が重要視する、あるいは望み、好む視点や方法、そして研究内容を再定置することであり、実のところ過去の学問的な営みのなかに、現在の自己の考えや主張を投影したり、仮託したり、刷り込んだりする行為なのである。それはまさに歴史の構築行為であり、豊饒な学問の歴史を取捨選択し再解釈しながら取り結ぶ学史の像と、その形成過程には、学史叙述者の意図や思想、嗜好というものが大きく影響していることを、まず確認しておく。本論で研究対象とする民俗学の歴史「民俗「学史」」にも、その叙述者の意図や思想、嗜好が影響していることは当然である——私も等しくその影響から逃れられない。

普通の学問においても、衆目一致するような客観的な学史というものは叙述しがたいが、民俗学は他のデイシプリンと比べて、よりいっそう学史を叙述するための困難性を有しているようである。それは、民俗学の学問としての輪郭が不明瞭であるという特徴に起因する。その特徴は、民俗学研究者のあいだに存在する、民俗学というデイシプリン規定の齟齬の問題といいかえてもよいであろう。「民俗学とは何か？」という命題に関して、共通理解がなされないかぎり、民俗学史は偏ったり、ずれたりするが、しかしその命題に対する答えは、漠然としたものでしかない。民俗学はその発生からして多様なのであり、日本国内を瞥見しただけでも「いくつもの民俗学」たち「民俗学に類する知的営為」が立ち上がってきた。その点において、衆目が一致する客観的な民俗「学史」を叙述することは、よりいっそう困難なのである。<sup>1)</sup>

たとえば、これまでなされてきた民俗「学史」検討の最初の部分。ここでは、そのデイシプリンとしての民俗学の「起源」「淵源」「源流」が、必ずといってよいほど言及されている。民俗学はいっつ起こったのか？ 誰が作ったのか？ どこで生まれたのか？ あたかも自らの家族の系譜を辿るように、自らがアイデンティファイする学問の系譜を辿るのである。しかし、家系図がその家の人々の思いによって、思いの外、書き換え、書き加えられることがあるように、学問の系譜もそれを引き継ぐと自負する人々の思い——あるいは思惑——によって、ときに書き換えられるのである。それぞれの民俗学史における民俗学の「起源」には、それぞれの学史叙述者の民俗学観が明快にあらわれている。

いわゆる土着的で伝統的な風俗習慣を民俗と捉え、それを発見し、収集し、記録する活動をとりあえず民俗学と定義すれば、柳田国男が述べたように本居宣長などの日本近世の国学に「この学風の芽生え」（柳田 一九三五・九一）を見ることができよう。また文化年間（一八〇四—一八〇八）に屋代弘賢によって行われた「風俗問状」の調査や、喜多村信節が一八三〇（天保元）年の江戸の習俗記事を集めた『嬉遊笑覧』などを、初期の「計画的採集の試み」（柳田 一九三五・九五）として見なすことも可能であろう。さらに近世の多くの民俗に関する随筆、見聞録、紀行文、考証学に、その「起源」を求めるところも可能である。<sup>2)</sup>

一方、民俗学をその偉大な創始者・柳田国男が近代日本において創出し、それを直線的にいままで継承した学問だと理解すれば、その学問の「起源」は、柳田国男の郷土研究や民間伝承論といった諸活動のいくつかの画期に求められるであろう。もちろん、柳田の民俗学以前にも日本国内に類似する学問的動き「民俗学に類する知的営為」は存在した。しかし、民俗学をあくまで柳田の所産だと絶対的に見なせば、そのような類似した営為は、あくまで民俗学の「萌芽」や「前史」として扱われるのみで、民俗学そのものとしては扱われない。柳田こそが民俗学の「先祖」であり、柳田が理論的な学術書誌をまとめ、全国各地で民俗談話会や郷土研究会などの「野の学問」の地方組織が同時に偶成し、それに呼応するかのごとく全国組織である民間伝承の会が成立した一九三〇年代、つまり昭和初頭あたりが民俗学の「成立年代」となり、その「成立地」は「日本」ということになる。

さらに民俗学を、日本のアカデミックのなかに領域画定され、一つのデイシプリンとして存立する制度的な「学問」として「幻想」すれば、一九三五（昭和一〇）年に成立した民間伝承の会が一九四九（昭和二四）年に「学会」となって日本民俗学会に名称変更され、その機関誌名が一九五三（昭和二八）年に『民間伝承』から『日本民俗学』と改められ、一九五八（昭和二三）年に旧・東京教育大学や成城大学に民俗学の専門課程が作られ、学生への民俗学教育が開始されたあたりに、その「起源」を求めることができよう。この場合の「成立地」もまた「日本」である。

上記の三つの（日本の）民俗学の捉え方——さらにはいくつもの多様な捉え方が可能である——は、あくまで日本と

いう閉ざされた場に立脚した捉え方である。そこではイギリスやアメリカ、ドイツといった欧米の民俗学、また中国や韓国、インドなどのアジアの民俗学との関係性は顧みられることはない。ここでは「国産の学問」として、世界のなかで「独自」に発展した日本の民俗学史が、声高に述べられるだけである。

ところが世界の民俗学史を俯瞰すれば、日本に限らずそれぞれの国や地域の民俗学も、個々に独自の発展史を有していることが理解できる。世界各所の国家や地域において、それぞれ異なる近代的状況に拘束されながら、「いくつもの民俗学」たちが同時多発したのである。そのように考えると日本民俗学 (Minzokugaku) やイギリス民俗学 (Folklore) 、アメリカ民俗学 (American Folklore) 、ドイツ民俗学 (Volkskunde) 、中国民俗学 (Minsuxue) 、韓国民俗学 (Minsokhak) を、民俗学という一つの言葉で括り上げて表現することは、本来、かなり困難であることが分かる——以後、本論ではこの多様な「民俗学に類する知的営為」を、その多様性を示すがゆえに「民俗学」と括弧付きで表現する——。

これまで、それぞれの「民俗学」たちは、それぞれの国でデイシプリンを標榜してきたものの、世界的に普遍的な「一つのデイシプリン」として纏め上げられてはいない。それらは、学問の端緒において世界各所の国家や地域の「ヴァナキユラー」(vernacular) な文化理解とその復興運動、そして学問化運動、知的営為の集合体なのである。それぞれの「民俗学」たちは、その起こり来たる来歴やその学問の目的、そして定義や概念、用語、研究対象、理論、手法など、学問の種々の局面で必ずしも相同ではない(普二〇二二)。

しかし一方で、各国の「民俗学」たちの発展は、完全なる独立独歩ではなかった。日本の「民俗学」に限ってみても、それは海外の「民俗学」たちから、少なからず影響を受けていた。たとえば、一九〇八年に「グレートブリテン及びアイルランド連合王国」(通称イギリス)においてジョージ・ローレンス・ゴーム (Sir George Laurence Gomme) が『歴史科学としての民俗学』(Folklore as an Historical Science) を上梓したが、それがのちに重出立証法など、柳田国男の民俗学方法論へ直接的な影響を与えたことは夙に有名である(モース 一九七六、甲元 一九九〇など)。一九一〇年代

には、柳田はジェームズ・フレイザー (Sir James George Frazer) の『金枝篇』(The Golden Bough) を繕読しており、それを頻繁に引用していた<sup>\*4</sup>。また、フィンランド学派のカール・クロン (Kaarle Krohn) が一九二六年に著した『民俗学方法論』(Die folkloristische Arbeitsmethode) で開陳された民俗の分布論が、逆説的論理として柳田の周圍論の基底に据えられていることも明白である(岩田 一九九八:二五四)。さらに、一九三〇年代には、フランスの民族誌学者・パウル・セビオ (Paul Sébillot) の語彙主義的方法が、柳田によって批判的に継承され、またその方法が紹介された雑誌『民間伝承』では、海外の研究紹介が積極的になされていたことも明らかにされている(石井 二〇二二:一七〇—一七二)。国産の学問であることが、ことさら歪んだ形で喧伝されている日本の「民俗学」ですら、その背景には海外の「民俗学」たちの大きな影響を読み取ることができる。

そのような事実に着目するならば、日本「民俗学」も世界史の潮流のなかで理解し、その潮流のなかに学史を再定置する必要があるだろう。本論は、日本「民俗学」史を世界的な展望、とくにfolkloreという近代のまなざしを生み出した一九世紀イギリス「民俗学」との関連で読み直すことを目的としている。ここでは、これまでの日本「民俗学」史研究が看過してきた——避けてきた——folkloreに関連する海外文献を、分析の主たるテキストとして検討する。

ただし、本論では上述したような海外の「民俗学」たちが生み出した理論や方法の、日本「民俗学」への直接的な導入や受容、援用、そして影響について検討するのではない。日本人による日本「民俗学」に先行して展開された、西洋人による日本「民俗学」の動きを検討するのである。また、西洋人による日本文化の発見、収集、記録活動を、深く考えることなくただ漫然と粗雑に、いまの日本の「民俗学」と関連づけるものでもない。イギリスで創造されたfolkloreという用語や概念を直接使用した日本文化の発見、収集、記録活動を検討するのである。

より具体的にいうならば、人口に膾炙している柳田を祖先とする日本民俗学——あえて括弧をはずそう——が成立する以前、端的にいえば一九世紀後半に、イギリス「民俗学」の運動体が日本へと到来し、folkloreという言葉を使いつつながら、日本の知的営為とは異なる形で日本の伝統文化を積極的に発見し、収集し、記録し、表象し、そして海外

へ発信していた状況を検討する。イギリスで生まれたfolkloreというキーワードを使って、日本においてどのような人々が、どのように「民俗学」を展開していたのか。そして同じ時代に、海外においてfolkloreという言葉を用いてどのような人々が、どのように「日本」を語り、描いていたのか。さらに、その両者のあいだにどのような関係があったのかといった問題を、実証的に明らかにすることが本論の目的である。それは日本「民俗学」の歴史であるとともに、イギリス「民俗学」の歴史でもある。さらにそれは「人類学」の歴史とも密接に関わっている。

## 二、フォークロアという「まなざし」

一八世紀、ヨーロッパにおいて北欧やドイツを中心に、土着的で伝統的な風俗習慣を発見し、収集し、記録する活動が開始された。たとえば、一八世紀スウェーデンでは、のちに「分類学の父」と称えられるカール・フォン・リンネ(Carl von Linné)が、博物誌や自然誌を包括する地域誌をまとめるなかで民俗文化を採集した。一七三二年のラップランドを皮切りに、彼はスウェーデン各地で調査旅行を行い、多くの旅行記録を出版している。そのなかで一七四九年に調査旅行が行われ、一七五一年にその成果がまとめられた旅行記録『スコーネ旅行』は、スウェーデンの「一八世紀の歴史学や民俗学の資料として不可欠のもの」(塚田 二〇一四・七)となっている。

また、ドイツでは一八世紀後半には、詩人で哲学者でもあるヨハン・ゴットフリート・フォン・ヘルダー(Johann Gottfried von Herder)が、民衆精神の発露としての「民謡(民衆歌謡)」(volkslied)——それは現在の日本で用いられる民謡とは意味が異なる概念——を造語し、それを収集し、『民謡集』として集成した——それにはヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ(Johann Wolfgang von Goethe)も関与していた——(志村 二〇〇三)。さらに、一九世紀初頭には、グリム兄弟が民謡の収集活動に動しんだ。これら「民俗学」たちの萌芽は、伝統庶民文化の発見や評価と軌を一にしており、さらにその発見や評価は、精神的に純粹で本質的な過去の存在を想像するロマン主義的思考に少なからず影響を

受けていた。Volkskunde #ドイツ「民俗学」が、近代化の過程において、郷愁に満ちたロマン主義、そしてナショナリズムのなかから生まれてきたことは広く知られている。一九世紀に活躍したヴィルヘルム・ハインリヒ・リール(Wilhelm Heinrich Riehl)は、伝統文化の研究を通じて、ドイツ人の統一的な民族精神を抽出し、それを国家政策に活用することをドイツ「民俗学」の一つの役割とした。それがエスノ・ロマン主義的であり、のちに第三帝国期の国家社会主義に利用されたことは周知のとおりである(Kamenetsky 1972, 1973, 1977; Wilson 1973)。

本論で取り扱う、イギリス帝国の絶頂期であるビクトリア朝において生じたfolkloreをめぐる運動もまた、このようなロマン主義的色彩を強く帯びる「民俗学」の模索の一つであった。しかし、それは不完全ながらもディシプリンへと体系化を目指す運動体でもあった。このfolkloreという言葉がどのように構成され、広まっていたのか、まずは確認しておかなければならない。それは、基本的に好事家たちの知的な嗜好であったが、内面に一方で階級闘争、また一方でドイツとは異なるナショナリズムの昂揚と部分的に重なり合う運動性を有していた。

周知のとおり、folkloreという言葉はウィリアム・ジョン・トムズ(William John Thoms)が創り出したものである。好古家(antiquarian)であり、イギリス貴族院図書館の官吏(のちに副館長)であった彼は、一八四六年八月二日に、『アンブローズ・マーティン』(Ambrose Merton)の筆名で、文芸誌『アシニアム』(Athenaeum)に『FOLK-LORE』と題する手紙を送った。それは八月二二日刊の『アシニアム』九八二号に短評として掲載された。彼は、大衆文化や民間文学を肯定的に表現するために、「人々の持つ知識、伝承」(The Lore of the People)の意味であるFolk-Loreという合成語を創り出し、その文化の収集と保存を訴えたのである。『アシニアム』誌は、これに呼応してこの一八四六年八月から一八四九年一月にかけてFolk-Loreのコラムを継続し、それにトムズが大きく貢献した。その結果、その用語がまずはイギリスに広まることとなった(Emrich 1946: 355-364)。後述するように、このトムズの活動は一八四九年から彼が刊行した『ノーツ・アンド・クエリーズ』(Notes and Queries)誌へと引き継がれることとなる。ちなみに、このFolk-Loreとどう言葉が誕生する以前に、ドイツにはVolkskunde(ドイツ語でfolkloreに相

当する) という言葉がすでに存在していた。トムズはグリムや他のドイツの「民俗学」者の仕事に親しんでおり、*Volkskunde* の語を見知っていたはずだが、*Folk-Lore* は彼が発案した英語起源の語であるとされている。*Volkskunde* は一八二二—三五年にわずか五例が限定的に使用されるのみで、*Volkskunde* が文化を語る上で意味ある用語として使用されたのは、リールが一八五八年に著した論考「科学(学問)としての民俗学」(*Die Volkskunde als Wissenschaft*) を待たなければならなかったという (Emrich 1946: 371-372)。

またフランスでは、トムズが創った *folklore* に影響を受けて *folkloristes* という名詞が生まれたが、結局、普及せずパウル・セビオたちは当初 *traditions populaires* を多用した。むしろ *tradition* をベースとする *traditionisme* という言葉も使用された。しかし、フランスにおいて *tradition* や *traditionisme* という言葉が、今昔問わず政治的な含意を持つ語——政治家や国家が使用する用語——であったため、その使用が避けられ、結局、セビオやアルノルト・ファン・ヘネップ (Arnold van Gennep) とびつた一九世紀末から二〇世紀初頭のフランスの「民俗学」者たちも、最終的には *folklore* の語を使用するようになったという (Emrich 1946: 373-374)。

ここに登場するフランス語の *traditions populaires* という言葉は、日本の「民俗学」でも馴染み深いテクニカル・タームである。柳田国男が「民俗学」という言葉を使用する以前に、「民間伝承論」という用語を重視したことはあまりにも有名であるが、それはこの *traditions populaires* の翻訳語であった。柳田は、『民間伝承論』(柳田一九三四) のなかで、自身が推進しようとする新しい学問である「民間伝承論」は、「欧羅巴大陸若干の旧国に於て、*Les Traditions Populaires* などと謂つて居る一団の知識」であるとしている (柳田一九三四: 一八)。ここで柳田は「Traditions (トラチシオン)」を「一般に用いられる「伝統」ではなく「伝承」とあえて訳した。それは、「トラチシオン」といふ語は、其本国「フランス」引用者注」に於ても色々政治上の聯想があつて困ることは、日本今日の「伝統」という訳語が之を推測させる」(柳田一九三四: 一八) からである。柳田にとつて「伝統」という語は、「政治上の聯想」がなされる「困る」ものであった。この柳田の見解は、当時のフランス「民俗学」者たちが、*tradition* や

*traditionisme* の語を避けた状況を、彼が「正しく」理解していたことを示している。日本「民俗学」のジャーゴンである「伝承」という奇妙な名詞の創出と、また「政治性を無視し、看過し、排除し、それから逃避しようとした」(菅二〇〇八: 一一) 柳田民俗学の性格づけに、そのような一九世紀末から二〇世紀初頭のヨーロッパの「民俗学」事情が、大きく影を落としていることに刮目しなければならぬ。

さて、トムズによって生み出された *Folk-Lore* という合成語は、その後 *folklore* の二単語、あるいはハイフンを抜いて連結され *folklore* という一単語で使用されるようになる。それは今日では、日本語でいう文化事象としての「民俗」と、学問領域としての「民俗学」との双方を、英語で表現する単語として扱われているが——この英語と日本語も本来相同ではない——、その初発においては文化事象を表現する用語として主に用いられていた。*folklore* はいにしへの文化の残滓であり、それへまなざす視点はロマン主義的、さらに古きものほど価値があるとする始原主義 (*primitivism*) 的な思考によって彩られていたのである。そして *folklore* を過去からの「残存」(*survivals*) として見なし、過去の本質をいまに伝える文化、そしていま喪失しつつある貴重な文化としてノスタルジックに想像したのである。その点において、その概念のなかに好古学的思考が根差していたことは間違いない。

ただし別の局面から見れば、*folklore* を発見する行為は、好事家たちが嗜んだノスタルジックな趣味の位相とは異なっており、政治的な運動の位相にも立ち現れたと捉えることができる。関敬吾は、一九世紀中葉のイギリス「民俗学」の成立は、「社会的には産業革命によって階級対立が激化し、革命的不安は増大し、社会の全面的検討、新しい社会理論を形成しようとする気運がしだいに高まりつつある時代」の社会情勢に対応したもので、一八四七年の共産主義者同盟の開催やその翌年の共産党宣言、そして一八四八年の二月革命といった社会状況を反映していることを指摘している (関一九六〇: 一九—二〇)。イギリスのなかのイングランドにおける *folklore* をめぐる諸活動は、始原的な本質的な文化のなかに庶民、あるいは大衆、民衆といった階級の文化を発見する動きとして解釈することが可能なのである。さらに *folklore* をめぐる諸活動は、それらの人々を肯定し、激励し、鼓舞し、それらの階級の政治的な正統



性を高めようとした動きとして、解釈することも可能なのである。

さて、トムズが創作したこの *Folklore* という用語は、徐々にイギリス社会、そしてそれを越えた欧米社会に受容され、その語が誕生して三十数年後の一八七八（明治一二年）——日本の代表的フォークロリスト・柳田国男が三歳のころ——には、後述するようにその語を付す世界最初の国レベルの学協会であるイギリス民俗学会（The Folklore Society）が成立する。それまでの三十数年間に、*Folklore* という言葉や概念は、古風な文化に関心を持つ好古家たちを大いに刺激することとなった。

もちろん、その用語の誕生以前に、*Folklore* に類する文化に対する関心がなかったわけではない。むしろ、そのような関心が、イングランドに限らずイギリスの諸地域で長い年月をかけて高まってきたなか、満を持してこの言葉が登場したのである。たとえば、一八世紀と一九世紀初頭のウェールズでは、「一方では古来の生活様式が衰え失われたのに対し、他方ではウェールズのな物への関心がかつてなかったほど高まり、また強い自己意識に基づき、それらを保存し発展させようとする活動が行われた」（モルガン 一九九二：七三）のである。また一九世紀初頭、当時イギリスに併合されていたアイルランドでは、*The Dublin Penny Journal* という啓蒙誌が発刊（一八三三年）され、それに多くの *Folklore* と呼べる——もちろん、当時はまだその用語は誕生していない——伝説類が記録されている。それは、のちにアイルランド独立運動と軌を一にする文芸復興運動の端緒ともなった。

*Folklore* という用語は、その用語が誕生し拡散した時期、すなわち一九世紀中後期には、伝統的な文化事象を表現する言葉として、地域的にも研究分野的にも幅広く用いられ、定着していったようである。たとえば、その用語が誕生して三年後の一八四九年に設立されたアイルランドのキルケニー州考古学会（The Kilkenny Archaeological Society）の機関誌の創刊号巻頭言において、早くも使用されている。そこでは、「小農階級と日々ともにし、彼らの言語、感情、伝統、および *Folklore* を完全に理解している人々」（anon. 1849: xiv）という表現で会員の貢献が称えられている。そして、同誌の一卷二号から *Folklore* の内容項目が特別に立てられ、アイルランドの伝統的な宗教や習俗、

伝説などの価値が発見されていく。その初回に執筆したのがニコラス・オカーニー（Nicholas O'Kearney）であった。

アイルランドの詩人であった彼は、キルケニー州考古学会の会員であるとともに、オシアン協会（The Ossianic Society）の会員でもあった。一九世紀のアイルランドには博識な人々が集う博物学、好古趣味の団体がひしめいていたが、オシアン協会はそのような団体の一つで、一八五三年にダブリンで創設されたアイルランド文学の団体である（Somerville-Woodward 1999）。一八世紀半ば、スコットランドの詩人・ジェームズ・マクファーソン（James Macpherson）が、スコットランドの古代に伝えられていた口承文学として一大叙事詩『オシアン』を「発見」し、その叙事詩を文芸作品として発表した——この作品は先述したドイツのヘルダーの民謡論に大きな影響を与えた——。しかしその内容は、本来はアイルランド地域の伝説に由来するものであり、それを改竄・捏造したものであるとして、マクファーソンはその後、非難された（トレヴァーローパー 一九九二：三二—三三—三五）。そのような歪められたアイルランドの伝統文化を「正しく」位置づけ直すために、古記録や民間伝承を保存し、出版公開する目的でアイルランド人によって設立されたのがオシアン協会である（anon. 1853: 1-3）。

オシアン協会は活動の目的として、「我々の時代であるフェニアン期 [Fenian period——引用者注] のアイルランドの記録を刊行すること、そして他の歴史文書を翻訳、注釈すること」（anon. 1856: iii）をその会則に掲げている。「フェニアン」(Fenian) とはケルト神話に登場する「フィアナ」(Fiana) 騎士団に由来し、「我々の時代であるフェニアン期」とは、すなわちイギリスによる植民地、併合という歴史を辿ってきたアイルランドが独立していた往古の輝かしき時代、すなわち植民地から一つの国家へと独立することを希求していた一九世紀アイルランド人たちが、自己同一化していた理想の時代である。そのような古代の本質的アイルランド文化を掘り起こすことを目的とした団体の機関誌 *Transactions of Ossianic Society* の創刊号で、オカーニーは「ガブラの戦い」(Battle of Gabhra) という古代物語のアイルランド語記録と英語翻訳を行っている（O'Kearney 1853）。

ちなみにフェニアン、またフェニアン主義 (Fenianism) という言葉は、*Folklore* へのまなざしが生まれた一九世紀

中葉から隆盛したアイルランド独立運動に関わった人々や、アイルランド民族主義をも意味している。イングランドにおいて階級対立という社会的背景のもとfolkloreへのまなざしが強化された同時代に、アイルランドではそのような民族主義運動と通底する文化運動に関わっていた人々が、folkloreへのまなざしを強化させていたのである。オカーニーはのちに、イギリス民俗学会の学会誌 *The Folk-Lore Record* 二巻に論考を投稿 (Coote and O'Kearney 1879) するなど、「民俗学」の活動を継続し、現在ではアイルランド・フォークロリストとして位置づけられている。

一八五四年には同じくアイルランドのアルスター地方考古学会誌 (*Ulster Journal of Archaeology*) などでfolkloreという用語の利用が見られるように、folkloreへの関心はその語が生み出されたイングランド以外の地域でも深められていく。当時イギリスに併合されていたアイルランドにおいて、その用語が積極的に用いられていたことは、folkloreと自文化表象、ひいてはナショナルリズムとの親密性を知るうえでも興味深い。それは、ドイツのような国家統合のための自文化表象とは異なり、国家独立のための自文化表象を生み出す運動と連動したのである。それはもちろん、イングランド人のトムズが企図するところではなかったであろう。

一方、このようにfolkloreというまなざしでエスニック・アイデンティティと絡みつつ自文化表象がなされていた時代、folkloreという概念や用語は、さらに異文化への関心をも高めることとなる。つまり、folkloreという概念は、好古学的観点から自文化と異文化の双方をとまなざす視角を生み出したのである。そしてこの視角によって、日本文化も「語られ」「描かれる」対象となっていた。

### 三、フォークロアという「まなざし」によって描かれた日本

トムズは、一八四九年に『ノーツ・アンド・クエリーズ』(*Notes and Queries*) という雑誌を創刊した。それは文学者、芸術家、系図学者などに加え、好古学者 (antiquary) を対象とした雑誌である。その雑誌の表題で「相互連絡の

ための情報伝達手段」(Medium of Inter Communication) と謳っているように、それは読者間の交流と情報交換を目的としたものであった。そして、それは広範囲な分野にわたって読者が問題を提起し、質問し、応答を繰り返す「一九世紀のウィキペディア」ともいえる情報メディアであった。この『ノーツ・アンド・クエリーズ』に関しては、日欧交渉史を専門とする志村真幸によって、すでに詳細な検討が行われている (志村 二〇〇九、二〇一一a、二〇一一b、二〇一一c)。

『ノーツ・アンド・クエリーズ』は、「イギリスを中心とした欧米のアマチュア知識人が、フォークロア、民俗学、語源学、歴史、人物などについて議論した投稿誌」(志村 二〇一一・二一九) であり、イギリスの「民俗学」の体系化に大いに貢献したのみならず、ひいては日本の「民俗学」の発展にも大きな影響を与えた。それは日本の「民俗学」にとっても看過できない重要な役割を果たしたのである。

第一に、それは日本の「民俗学」の学史に大きな足跡を残した南方熊楠の、イギリスにおける発表媒体であった点で重要である。志村によれば、南方の同誌への掲載論文数は一九〇三年以降、三三四本 (ただし、日本関連記事は一九本のみ) にも上り、のちに日本語論考として発表された南方の業績には、この投稿論文から翻訳されたものも多いという (志村 二〇〇九・六八)。その翻訳は『郷土研究』など、柳田国男が主宰した「民俗学」の媒体にも翻訳掲載されている。

第二に、それは日本の「民俗学」に情報交換の手法を提供し、ひいてはその手法が学問的特質——「野の学問」——を体現した点で重要である。志村は次のように述べる。

「[N&Q]」「ノーツ・アンド・クエリーズ」——引用者注——は日本の民俗学の出発においても少なからぬ意味をもつ。

熊楠が柳田国男や高木敏雄に協力して一九一三年に創刊された『郷土研究』は、最初の専門誌と位置づけられる。そのモデルのひとつが[N&Q]であり、実際に[N&Q]を真似た質疑応答欄が設けられるなどしたのである。熊楠は手探り

の状態であった日本の民俗学に、欧米の最新の方法論や研究成果を伝える役割を果たしたが、その際に選ばれたのが「N & Q」だったのである」(志村 二〇〇九:七〇)。

一九一三年から一九一七年にわたって四卷二二号まで刊行された『郷土研究』には、「資料及報告」の欄が設けられ、読者からの投稿を受け付け、各地の風俗慣習の報告がなされ、さらにその報告へのリプライがなされていた。さらにこの手法は、『郷土研究』にのみ採用されたのではなく、その後、発刊された雑誌の性格にも影響を与えた可能性がある。たとえば、一九二五年に柳田国男が刊行した雑誌『民族』(一九二九年廃刊)には、「資料・報告・交詢欄」が設けられ、各地の「民俗学」に携わる人々から情報が寄せられた。また、柳田の民俗学の成立に大きな役割を果たした一九三五年創刊の『民間伝承』にも、学会員が三〇〇字程度で自らの疑問や発見を発表する「会員通信」が設けられていた(鶴見 一九九八:三三)。そして、その通信欄には、一九三六年の創刊一〇号からある特定課題について情報を集積する「共同採集報告」欄が組み入れられることになる。

それら日本の「民俗学」の媒体で採用された会員のコミュニケーションの方法は、『フーツ・アンド・クエリーズ』の手法の直接的な援用であるとは必ずしも断定できないが、そこからヒントを得た『郷土研究』の手法が、さらに改良されながら継承された可能性は大いにある。そして、この手法こそが、地方の多様な人々を巻き込んだ「野の学問」の鼓舞と、その全国的な統合という民俗学運動に大きく貢献したのである。このイギリスで生み出された手法は、単なる情報収集の手法ではなく、日本の柳田民俗学の基礎的性格を決定づけた手法として理解すべきである。

さて『フーツ・アンド・クエリーズ』が、日本の「民俗学」に影響を与えた第三点として、そこに西洋人の眼から表象された日本の民俗が、数多く収集されている点を指摘することができる。そして、そこではfolkloreという概念によって、日本文化の一部が切り取られ記述されていた。柳田国男が誕生する以前に、日本から遠く離れた地で、イギリスの「民俗学」の動きと連動しながら、日本文化が「語られ」「描かれ」ていたのである。

志村の分析によると、『フーツ・アンド・クエリーズ』に寄稿されたアジア(東洋)に関する記事では、インド関連がもっとも多く、次いで中国、日本、ベルシヤとなるという(志村 二〇二二:一三〇)。日本関連記事は、一八五七年にルイス・フロイス(Luis Frois)の著作の内容に関して質問した記事が初出であるが、一八五〇年代はこの一本にとどまる。しかしその後数を増やし、一八六〇年代には五トピック九本、一八七〇年代には一〇トピック一本、一八八〇年代には三トピック一五本、一八九〇年代には六トピック九本、一九〇〇年代には一トピック二八本と、コンスタントに日本文化が取り上げられていた。その内容すべてがfolkloreであるわけではないが、いくつかの記事のなかで婚姻習俗や呪術、葬式、年中行事、俚諺、迷信、食生活などがfolkloreという表現をともなって記述されている(志村 二〇二二:三三二―三三七)。

志村はそのような記事を投稿した者のなかで、日本通と呼ぶべき二人の人物に注目している。一人がウィリアム・ヒュー・パターン(William Hugh Patterson)という人物で、一本の日本関連の記事を書いている。彼は、一八七三年七月刊の『フーツ・アンド・クエリーズ』四集二巻で、『ナガサキ・エクスプレス』(The Nagasaki Express)という英字新聞の記事を引用して、「日本の民俗」(Japanese Folk Lore) (Patterson 1873: 44)のタイトルで狐の呪いの記事を投稿している。これは日本文化をfolkloreという用語を使って括り上げ、主題化した最初期の事例として、学史上重要な意味を持つであろう。

パターンは、北アイルランドアントリム州の都市であるベルファスト在住の「アマチュア学者」であり、一八七〇〜八〇年代に日本で発行された『ジャパン・ヘラルド』(The Japan Herald)、『ジャパン・ウィークリー・メール』(The Japan Weekly Mail)、『ジャパン・ガゼット』(The Japan Gazette)などの英字新聞をもとに、日本のfolkloreを集中的に取り上げたという(志村 二〇二二:一三八)。

このパターンについて、その人物像をさらに深めると、一九世紀後半のイギリスにおけるfolkloreへのまなざしが、彼の周りで交錯していたことが理解できる。アイルランド文学関連データベース RICOSO<sup>\*</sup>によると、パターン

ンは一八三五年にベルファストに生まれ（一九一八年死去）、家業の麻関連事業に一六歳より携わり、ベルファスト博物学者フィールドクラブ（The Belfast Naturalists' Field Club）やベルファスト博物学・哲学協会（The Belfast Natural History and Philosophical Society）のメンバーとなり、その会長も務めた地方の名士であった。アイルランド方言に関心を持っていたようで、一八八〇年に『アントリム州、タウン州において使用されるアングロ・アイリッシュの方言目録と語彙・慣用語の小辞典』（*A Bibliography of Anglo-Irish Dialects and a Glossary of Words and Phrases Used in Antrim and Down*）（Patterson 1880）を出版している。つまりバターソンも、上記のオカーニーと同じく、アイルランド人として自文化の発見、収集、記録活動にも動しんでいたのである。彼の娘のクララは、地方の子どもの伝統的な遊びの写真を多く撮るなど、やはりfolkloreへの関心を深めていた。

彼が所属した「フィールドクラブ」とは、地方の自然科学と考古学を合わせて学ぶ、いわゆる博物学の愛好家団体である。当時の考古学は博物学の一類であり、現在の考古学と異なって、歴史や民俗などの地方文化を渾然一体として考究する好古学としての知的活動であり、「民俗学」もそのなかで胚胎していた——ちなみにfolkloreという言葉を創ったトムズは、当初はそれを文学的遺物（literary antiquities）の一部門・分科（branch）として見なしていたものの、のちに考古学的遺物の一部門として考えるようになる（Emrich 1946: 367）——。

このクラブは、一八九三年「アルスター地方のためのベルファスト博物学者フィールドクラブ委員会」を設立し、その最初の講演会でfolkloreを題材としている。同年、同委員会は、フランシス・ジョセフ・ビッガー（Francis Joseph Biggar）による「地方民俗」（Local Folk-Lore）というfolkloreに焦点を合わせた講演会を開催したのである。ビッガーは、バターソンと同じくベルファスト生まれの好古家で、のちに同クラブの会長にもなる。彼は、アイルランドの言語や考古学に関心を持ち、四〇〇以上の論考をアイルランドの好古学の雑誌や新聞に投稿した。さらには、アイルランドのさまざまな文化活動のプロモーターともなり、アルスター図書館劇場やアイルランド民間音楽協会（\*11）の設立に関わっている。

なお、アイルランドの詩人で一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、アイルランドの文芸復興運動（\*12）に携わったウィリアム・バトラー・イエイツ（William Butler Yeats）もまた、彼らにfolkloreについて講演したという。（\*13）イエイツは一九二三年にノーベル文学賞を受賞する高名なアイルランド文学者であるが、一八八八年に『アイルランド農民のお伽噺と民話』（*Fairy and Folk Tales of the Irish Peasantry*）（Yeats ed. 1888）を編纂するなど、folkloreに深い関心を寄せていた。イエイツの詩やエッセイにはアイルランドのfolkloreが数多く盛り込まれており、彼のケルト文芸復興は「イングランド側の政治的支配から脱却して、ケルト人のための独立国を作る運動と併行した文化運動」（丸山一九六〇：四六）でもあった。

先に紹介したオカーニーと同じく、バターソンも民族主義的な政治運動と絡みつつfolkloreに関心を持っていたことが推察される。しかし、一方でバターソンは、地方好古家として地元のfolkloreを探究する活動を行い、そのような活動のなかで自文化を発見、収集、記録しただけではなく、異文化、それも見たことのない日本文化にまで目を向けていたのである。志村が指摘するようにその情報源は日本の英字新聞に頼っており、日本文化の直接的な発見、収集、記録段階に到達することはできなかったが、彼が異文化へ大いに関心を示し、情報収集をしていたことは間違いない。当時のfolkloreへのまなざしは、自文化を掘り起こす原動力となったのみならず、異文化をも掘り起こす原動力となっていたのである。それはノスタルジーや国家アイデンティティといった価値発見以前の、「奇異」な文化——自文化と異なるという意味——への好奇心が、folkloreへまなざす動機の一つとしてあったことを示している。

さて、志村は「日本通と呼ぶべき二人の人物」として、もう一人ジェームス・プラット・ジュニア（James Platt, Jr.）を紹介している。彼はアマチュアの言語学者で、一八九〇～一九〇〇年代に五本の日本関連記事を投稿している。中国・日本通で、「投稿論考には言語やフォークロアへの関心が強くあらわれて」おり、情報源として著名なジャパノロジストであるバジル・ホール・チェンバレン（Basil Hall Chamberlain）ら、来日した西洋人の著作を利用してという（志村二〇二二：一三八）（\*14）。ただし、彼の具体的な「民俗学」活動の足跡は不明である。

パターンソングやプラットの、日本の *folklore* の取り上げ方、姿勢は、いふなれば「アームチェア・フォークロリス」と評することができる。あくまで他の人々が記録した日本の二次資料に依拠したのである。彼らは、その後のイギリス民俗学会の活動に、本格的に参画した形跡はない。ただパターンソンは、イギリス民俗学会創設時に活躍したジョージ・ローレンス・ゴナムの妻で、児童の伝統的遊戯を研究したフォークロリスであるアリス・バーサ・ゴナム (Alice Bertha Gomme) に『新しいクリスマススの押韻詩』(The New Christmas Rhyme) という本を恵贈している (Ordisch 1893: 163) ことから、イングランドのフォークロリスたちとの交流があったことは間違いない。

#### 四、忘れられたフォークロリストI——イギリス民俗学会設立と一人の在英日本人

いまでも *folklore* という用語は、古臭いイメージを持たれている (菅 二〇二二: 六一—二) が、それは一九世紀末の学問未分化の時代にあつて、プレ学問の世界で共通して使われた革新的で前衛的な新用語であつた。研究対象や方法が明確に分ちがたい混沌とした知的営為の世界で、*folklore* という新概念が積極的に用いられていたのである。当時の考古学や人類学は、いまだ好古学という色彩を強く帯び、教育を受けた裕福な好事家たちが好奇心逞しく古風な文化を穿鑿していた。一九世紀の近代学問の誕生時において、考古学や人類学、そして「民俗学」という個々の領域は当初は完全には分岐しておらず、研究内容、そして研究に携わる人々も重なっていた。それは日本の明治期において人類学や考古学、そして「民俗学」が渾然となつていた状況と類似して興味深い。さらにいうならば、日本のその状況は、世界的な近代学問状況の一断面と見なすこともできる。

一九二二年にブロニスロウ・マリノフスキー (Bronislaw Malinowski) の『西太平洋の遠洋航海者』が発表され、大きな学史的画期を迎えた文化人類学もまた、それ以前には幾分なりとも好古学的性格を持っていたが、そこでも *folklore* の用語が使用されていた。イギリス人類学の礎を築いた「アンソロポロジスト」として後年位置づけられる

エドワード・バーネット・タイラー (Sir Edward Burnett Tylor) もまた、その語を頻繁に使用した一人である。「人類学の父」とも称される彼は、一八六三年 *Anthropological Review* の創刊号に「野人と野生児」(Wild Men and Beast-Children) (Tylor 1863) という論考を発表するが、そこで *folklore* の語を用いている。さらに、彼は *folklore* 研究に特化した団体・イギリス民俗学会の設立にも深く関わっていた。

一八七八年、ロンドンでイギリス民俗学会が設立されたことはすでに述べたとおりであるが、国レベルの学協会として世界でもっとも早く設立されたこの「民俗学」団体の評議会メンバーには、ゴナムやトムズといった、のちに「フォークロリス」と位置づけられる人々以外に、タイラーもその名を連ねていた。また、タイラーの弟子で「フォークロリス」であり、また「アンソロポロジスト」でもあるアンドリュー・ラング (Andrew Lang) も、評議会メンバーだった。そして、ソーシャル・アンソロポロジの祖とされるフレイザーもまた、その団体の機関誌に多くの論考を寄せていたのである。つまり、*folklore* を考究する団体であるイギリス民俗学会の活動は、学問として未分化の種々の分野に興味を持つ人々が集う場であった。その点において、本論で描出する当時の「民俗学」の状況は、文化人類学の状況としても敷衍しうる。

イギリス民俗学会の活動は、設立当初よりイギリス国内の文化、すなわち自文化の考究だけにとどまるものではなく、海外にも積極的に目を向けていた。イギリス民俗学会設立時の会則 (anon. 1878a: viii) において、「イギリスと海外」(British and foreign) の民間伝承や伝説的バラッド、地方俚諺、迷信、そして古い習俗を保護したり発表したりすることを、その会の目的としているように、*folklore* の探究において異文化へも大いに関心を寄せていたのである。その活動は、版図である植民地の文化を対象としていたとともに、その版図外の異文化をも探究の対象として含んでいた。そして、その対象のなかに日本の文化も含まれ、「語られ」「描かれ」ていたのである。

これまであまり指摘されてこなかったのだが、このイギリス民俗学会の設立時に、実は「一人のロンドン在住日本人」と「二人の東京在住イギリス人」が、その学会の会員名簿に名を連ねていた (anon. 1878b: iii-vii)。三人の日本関

REV. CHARLES SWAINSON, THE RECTORY, OLD CHURCH.  
 Hon. Wirt Sykes, Cardiff.  
 The Count Takatsgu Inouyé, University College, London.  
 William J. Thoms, Esq. F.S.A., 40, St. George's Square, S.W.  
 Samuel Timmins Esq. F.S.A. Elizabeth Lodge, Birmingham

写真 9-1 イギリス民俗学会設立時の会員名簿に記載されたロンドン在住日本人 "Takatsgu Inouyé"。ちなみに井上の下段には、folklore という言葉の生みの親であるウィリアム・ジョン・トムズ (William John Thoms) の名が見える (東京大学総合図書館所蔵 anon. 1878b; vii より転載)

の会員名簿からは、早くも井上の名前は見つけることができなくなる。井上省三はわずか一年ばかりイギリス民俗学会に加入したのみで、一八七九年の帰国を機にすぐに退会したものと推察される。

帰国後、彼は郷里徳島に戻る。そこで一八八一(明治一四)年一月から三月までのわずかのあいだではあるが、徳島尋常中学校(現徳島県立城南高等学校)で英語教師として教壇に立った(佐光 二〇〇七:七三六)。そして、一八八四(明治一七)年から外務省に勤務。そこで電信符号編纂掛や電信局に務めるなどしたが、官界で重用された形跡はない。彼の留学のキャリアや能力が十分に斟酌されなかったのは、主として薩長土肥の藩閥政治という状況、さらに彼の留学が官費留学に基づく公的なものではなく、蜂須賀茂韶がパトロンとなった私費留学であったことに起因すると推測される。そのためか彼は二年後に官を辞して英語教師となり、英語学校を創設したり、英語教材を刊行したりするなどの英語教育に関わった。そして仙台の第二高等中学校在職中の一八九一(明治二四)年に、三二歳の若さでこの世を去ることとなる(佐光 二〇〇七:七三六-七三七)。

井上のイギリス民俗学会入会の具体的理由や動機、経緯、そしてfolkloreへの関心については定かではない。また、その後の彼のfolkloreをめぐる具体的な活動、すなわち民俗を発見し、収集し、記録する活動の具体的な痕跡を、いまのところ見つけ出すことはできない。自文化——日本文化や阿波の文化——を描き出した彼による具体的な著作も、見つけたものではなく、単なる偶然の出来事であったのかもしれない。ただ彼の周辺を精査すると、その縁者から、自文化を自己の眼で描き出すことを強く意識し、実際に自文化を発

係者が、folkloreを考究するイギリスの団体の設立最初期に参加していたのである。

まず、「一人のロンドン在住日本人」を見てみたい。彼は、おそらくfolkloreという言葉にイギリスで直接接した、最初の日本人の一人であろう。イギリス民俗学会設立時の会員名簿には、「The Count Takatsgu Inouyé, University College, London」として記載が見える。この「University College, London」(University College London ロンドン大学の最古のカレッジ)に在籍する「The Count Takatsgu Inouyé」(ノウエ タカツグ伯爵)は、井上省三という人物に比定できる蓋然性が高そうである。この井上省三は、阿波国徳島藩旧藩士で初代徳島市長、衆議院議員を歴任した井上高格の嫡子として、一八六〇(万延元)年に現在の徳島市で生まれた。一八七二(明治五)年、旧藩主・蜂須賀茂韶がイギリスに留学したが、これに際し蜂須賀は三人の年少者を従者として帯同し、またそれぞれにイギリスにおける教育を受けさせた。この三人の一人として、井上省三は一三歳の若さにして渡英した。井上の自筆履歴書によると、同年「Working College」(入学)、「King's College School, University College School, University College London」に進み、一八七八年にThe Inner Templeという法曹院員外生として学び、一八七九(明治一二)年に七年半にもおよびる長期留学生生活を終えて帰国したという(佐光 二〇〇七:七三五-七三六)。

この履歴書に登場するUniversity College SchoolはUniversity College Londonの予科(付属校)である。ケンブリッジ大学図書館日本部長である小山騰氏の「教示による」University College Schoolの「学生登録名簿」(University College School Register for 1860-1931)に、「76-79 Inoue, seizer Takatsugu Armité」として記載があるという。つまり、「ノウエ セインウ タカツグ」なる人物が、一八七六年から一八七九年にかけて在籍していたようで、イギリス民俗学会の名簿上の人物は、この井上省三にほぼ比定できるのである。

一八七八年、一八歳の日本の若者が、イギリス民俗学会の創設時の会員となっていた。それは、日本の「民俗学」を民俗学の世界史的潮流のなかで理解し、その潮流のなかで学史を再 positioning する際に重要な出来事である。イギリス「民俗学」の草創期に、日本人が参画していたのである。ただし、翌一八七九年刊行のThe Folk-Lore Record二巻掲載

見し、収集し、記録した人物を、世に出していたことが分かる。

井上省三には、三歳年下の異母弟がいた。その名は井上十吉<sup>じゅうきち</sup>。一八六二年生まれの彼は、兄・省三が渡英して一年後の一八七三(明治六)年に、兄を追うようにして渡英する。これもまた、兄と同じく徳島藩旧藩主・蜂須賀茂韶の差配によるものであった(佐光 二〇〇七:五五九)。この一〇歳の男児は、小学校からイギリスで学び始めラグビー校で学んだのちに「King's College London」の応用科学部に進学し、さらに「Royal School of Mines」で鉱山学を修得する。兄がイギリス民俗学会に入会した当時、十吉はまだ一五歳であり、彼とイギリス民俗学会との直接的な関係を示す証拠はない。またその後の渡英中や帰国後も含め、彼自身がそれと関わったり、接したりした証拠もない。一〇年六か月の長きにわたる留学の後、一八八三(明治一六)年に帰朝した十吉は、ロンドン滞在中に知己となった杉浦重剛(当時、東京大学予備門長)の縁で、一八八四(明治一七)年より東京大学予備門で数学を教え、また東京大学理学部の実験助手となった。杉浦はのちに、国粹主義思想を信奉する思想家となり、その思想的影響を十吉が受けていた可能性があるという(佐光 二〇〇七:三四三—三四五)。

なお、井上十吉が東京大学理学部実験助手となったこの一八八四年が、日本の人類学史上、エポックメイキングの年であったことに思いを致す必要がある。一八八一(明治一四)年、のちに「日本の人類学の父」と称えられる坪井正五郎が東京大学理学部に入学した。そして、在学中の一八八四年に、坪井を含む東京大学理学部の「生徒」、および学部関係者一〇人が発起人となって、日本最初の人類学の考究コミュニティである「じんるいがくのとも」(同年、人類学会へ改称、一八八六年に東京人類学会へ改称、現在の日本人類学会の端緒)を設立したのである(川村 二〇一三:三八)。この「日本の人類学の父」である坪井が、「日本の民俗学の父」である柳田国男に少なからず学問的影響を与え、また柳田がその活動の初期——柳田民俗学確立以前——に、坪井が主宰した「人類学雑誌」へ多くの論考を寄せていたことは夙に知られている(曾我部・及川・今野 二〇〇七:二〇三)。坪井の活動は、日本の「民俗学の前史」(曾我部・及川・今野 二〇〇七:一一三)、あるいは「日本における民俗学研究の第一段階」(福田 二〇〇九:四六)と、日本の

民俗学史においても重く位置づけられている。

坪井は一八八九(明治二二)〜一八九二(明治二五)年の三年間、イギリスへ留学し人類学を学んだ——師にはつかなかつたが——。その際、当時、人類学と混じり合っていたFolkloreにも接することとなる。坪井が留学した一九世紀末のヨーロッパ各国には、すでにFolkloreという言葉が波及し、それへの共通の関心とそれを議論する共通の場が生み出されていた。たとえば、一八八九(明治二二)年八月にフランス・パリで第一回国際民俗学会議(通称「万国フォークロア大会」[The International Folk-Lore Congress])が開催された。国際民俗学会議は、Folkloreに関する世界最初の国際会議・国際学会である。またそれは、当時の欧米社会で同時多発的に勃興した各国「民俗学」の「首領」——創始者、指導者「たちが一堂に会した国際会議・国際学会でもあり、民俗学の世界史上、特筆すべき一大イベントであった。Folkloreという言葉に惹きつけられた彼ら彼女らは、この会議を通じて、まだ生まれたてで一つに凝結していなかった知的領域としてのFolkloreを、体系化された「学問」(science)にまで高めようと奮闘努力していたのである。

坪井が留学中の一八九一(明治二四)年、一〇月一日から土日の三、四日を除く七日までの五日間、ロンドンの好古

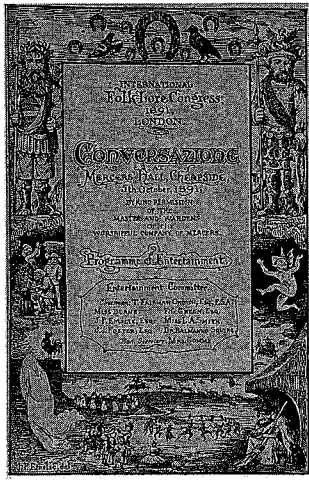


写真 9-2 第二回国際民俗学会議の催し物のプログラム表紙。エキゾチックな絵が施してある(東京大学総合図書館所蔵。Jacobs, Joseph and Alfred Nutt ed. 1892: 461 より転載)

学者協会(The Society of Antiquaries)において第二回国際民俗学会議が開催された。そこに坪井は出席し、「人類学の父」タイラーと初めて出会ったという——坪井はそのころのタイラーの人類学を時代遅れと見ていたが——(川村 二〇一三:一四二)。この第二回国際民俗学会議には、タイラーなどのイギリス民俗学会の重鎮のみならず、アメリカやフランス、さらにフィンランド、ドイツ、スペイン、ポルトガル、デンマーク、ハンガ

リー、ポーランド、オランダ、ギリシャなどの名だたるフォークロリストたちが集結している。大会会長には、当時のイギリス民俗学会長であったラングが就任し、またゴナム——彼が柳田の重出立証法に影響を与えたことはすでに触れた——やフレイザー——柳田が彼の『金枝篇』を繙読したことはすでに触れた——も中核的なメンバーとして活躍した。また、「アメリカ民俗学・人類学の父」として著名なフランツ・ボアズ (Franz Boas) や、「フィンランド民俗学の父」であるユリウス・クローン (Julius Krohn) の子で、フィンランド学派の泰斗カール・クローン (Karl Krohn) ——彼が柳田の周圈論に逆説的影響を与えたことはすでに触れた——、そしてフランスのパウル・セビオ (Paul Sebillot) ——彼が柳田の語彙主義的方法に影響を与えたことはすでに触れた——という、なんとも豪華な顔ぶれが揃っていた (anon. 1891)。この錚々たる面々のなかに、坪井正五郎がおそらく唯一の日本人として紛れ込んでいたのである。ただ、残念なことに二八歳のいまだ若き坪井はこの国際会議の正式なメンバーではなかったようで、メンバーリストにその名を見ることはできない。

第二回国際民俗学会議では、三日間にわたって民間説話分科会 (Folk-Tale Section)、神話分科会 (Mythological Section)、慣習・慣行分科会 (Institution and Custom Section) が行われ、最終日に一般理論と分類法分科会 (General Theory and Classification Section) で締めくくられた。そこで日本の folklore に関する研究発表がなされた形跡はない。ただ、この会議と並行して行われた「folklore 関連物の展示」において、参加したフォークロリストの収集品である日本の「在来信仰の社」や「掛け物」「切腹 (Harakiri) 用の小刀」「医師の薬箱」、さらに二つの「日本の民間説話のイラスト」が展示されている (Jacobs and Nutt 1892: 451-452)。

この会議に出席した坪井は、会場ですれ違う人々が、それぞれの国の「民俗学」のバイオニアとして、のちに高く評価されるフォークロリストたちであったことに、気がついてはいなかったであろう。また、のちに坪井と出会い、彼が構築した研究コミュニティに参画した柳田の研究方法に、彼らの研究が少なからず影響を与えることを知る由もなかった。ただ坪井は、一九世紀末の世界の最先端、最高水準の folklore 研究、および研究者たちをイギリス留学中

に確かに「目撃」していたのである。坪井は、folklore という語、およびその研究分野をそれほど重視してはいないが、このイギリス滞在中にイギリス民俗学会の機関誌を (東京) 帝国大学に送るなど (曾我部・及川・今野 二〇〇七: 一一三)、それに一定の関心を持っていたことは間違いない。

さて、以上のように folklore と因縁浅からぬ坪井は、そのイギリス留学前に folklore の学会に入会した兄を持ち、イギリス留学を終えて帰国したばかりの井上十吉と、偶然にも同じ時間帯を共有していた。残念ながら、いまのところ坪井と井上十吉、あるいは省三とのあいだに、直接の接触や交流が存在したことを示す確たる証拠資料は見つかっていない。年端も変わらぬ坪井と井上十吉が、立場こそ異なれ同じ時代に東京大学理学部に身を置いていたことは、単なる偶然の一致であったと見なすべきなのであろう。二人は校舎のなかですれ違うことはあっても、気がつかないくらいの間柄だったのかもしれない。ただし一方で、坪井と井上十吉とのあいだに、校舎のなかですれ違うときに軽く会釈するくらいの縁があったかもしれないことを想像させてくれる、いくつかの微かな手掛かりを見つけることもできる。

たとえば坪井の高弟で、その死後、人類学の後継者となった鳥居龍藏。彼は、奇しくも井上省三、十吉兄弟と同じ徳島市の出身であった。鳥居は、一八七一 (明治四) 年に徳島の裕福な商家に生まれ、一八七七 (明治一〇) 年に小学校を中退し独学で人類学を学んだ。一八八六 (明治一九) 年、一六歳で東京人類学会に入会。坪井との文通による交流を経て、一八八八 (明治二二) 年に坪井が徳島を訪れて二人は直接出会うこととなる。その後、坪井の知己を得た鳥居はその勧めにより一八九二 (明治二五) 年に上京、翌年から東京帝国大学理科大学人類学教室標本整理係として研究に従事した (福田 二〇〇九: 三九)。この鳥居が一八九二年に二三歳で上京する以前の 一八七九〜八四年、すなわち鳥居が九歳から一四歳にかけての五年ほどのあいだ、イギリスより帰国した井上省三が、偶然にも同じく徳島に住んで、その中学で短期ながらも教鞭を執っていたことはすでに述べたとおりである。小学校を中退した鳥居が、当時、「中学校にも進学せず、必要に応じて個別に中学校の教師の教えを受けながら独学」 (天野 二〇〇五: 八五)



していたことが指摘されているが、これは、徳島において鳥居と井上省三との袖がふれあつた可能性があることを揣摩憶測させる、微かな手掛かりとなつてくれる。

また、井上兄弟をイギリスへと渡らせた蜂須賀茂韶。彼は、間接的ながら坪井正五郎とつながりを持っている。坪井は、一八八六(明治一九)年に帝国大学理科大学を卒業し、大学院へと進学した。彼は大学時代に動物学を専修していたが、その動物学の主任教官となつたのが箕作佳吉である。坪井が大学院に進学するときに、彼はそれまで大学院に存在しなかつた人類学科を新たに申請して、そこに入学した。一介の大学生が望んだこの新学科設立が実現した背景に、この箕作、さらに箕作の実兄である帝国大学理科大学学長・菊池大麓の助力保護があつたことが指摘されている(川村 二〇三・四一―四二)。坪井は、のちにこの菊池・箕作兄弟の異母妹・直子と結婚することになり、同兄弟と坪井との関係の深さが理解できる。

後年坪井の義兄となり、彼を保護した菊池大麓は、東京帝国大学総長、文部大臣などを歴任した著名な数学者である。ただし、イギリス留学中に、ジャパノロジストたちが寄稿した雑誌に日本の昔話に関する論考を寄せているように――後述する――、彼は文化にも関心を持つ知識人であつた。菊池は、一八六六(慶應二)年にイギリスに留学し、一度帰国後一八七〇(明治三)年に再び渡英してケンブリッジ大学で数学と物理学を学んだ(川村 二〇三・四二)。ところが一八七四(明治七)年、その留学の途次に政府より帰朝の命を受けるとなり、学業断念の瀬戸際に立たされた。菊池はここで退学して帰国することを惜しみ、そのとき同じくイギリスに留学していた蜂須賀茂韶に助力を頼み、そのおかげでイギリス滞在を継続してケンブリッジ大学を卒業することができたのである(箕作 一九一七・一五八)。蜂須賀は、菊池の恩人だつた。

この蜂須賀とともにイギリスに留学していた井上兄弟が、蜂須賀の身近なところで付き従つていたことからすれば、彼らがイギリスで直接・間接に菊池と接触していたとしても不思議なことではない。これは蜂須賀―菊池という線を通じて井上兄弟と坪井とのあいだに縁があつたことを、やはり揣摩憶測させる微かな手掛かりとなつてくれる。

蜂須賀家と坪井正五郎との縁はこれにとどまらない。一九〇二(明治三五)年に、二条基弘公爵が中心となつて華族人類学会を組織したが、それに蜂須賀茂韶の長男・蜂須賀正韶が参加し、講演を行った坪井と交流している(川村 二〇三・三二六)。

以上のような手掛かりは、証拠としては薄弱でしかなく、そこで想像される人間関係はあくまで憶測の域を出ない。しかし、当時の留学生や知識人のネットワークがことのほか緊密であつたことからすれば、それぞれの重要アクターの関係性を仄めかすくらいの傍証にはなつてくれるであろう。ここでは、その関係を匂わせる程度でとどめておこう。ちなみに、蜂須賀茂韶は、後述するアーネスト・メイソン・サトウ(Sir Ernest Mason Satow)とも親交が厚く、渡英に際しサトウを訪ねて事前研究も行っている(佐光 二〇七・五五二)。サトウはイギリスの外交官であり、著名なジャパノロジストであるが、このサトウの周りのジャパノロジストたちが *folklore* という用語を用いて日本を描いたことについては、のちほど詳述する。

さて、話を井上十吉に戻そう。

十吉は、一八九三(明治二六)年に第一高等中学校(大学予備門が改組)を退職し、その後、英字新聞『ジャパン・ガゼット』勤務を経て、兄と同じく外務省に入省した。翻訳官や海外大使館の書記官などを歴任するが、彼の経歴を鑑みれば、彼もまた兄同様に官界において重用されたとは言ひ難い。そのためか彼は、外務省在任中より、英語教育の基礎的な教材作りや執筆活動を熱心に行い、一九一八(大正七)年に退官後は、すでに逝去していた兄と同じく英語教育界へと転身する。十吉は、官界に身を置く傍ら『井上英和大辞典』『井上和英大辞典』などの辞書類を編纂したり、日本人の手による最初の英語教科書を編纂したり、英語通信教育を始めたたりするなど、日本近代の英語教育に大きな足跡を残し(佐光 二〇七・三四三―三六九)、「英学会の父」とも称されていた(日本英雄傳編纂所 一九三六・四三二)。

十吉は、幼少期より一〇年にわたつてイギリスに滞在したため英語能力に頗る秀でており、日本人向けの英語教育に携わる一方、イギリス外交官ウィリアム・ジョージ・アストン(William George Aston)――ちなみに彼とサトウ、

後述するフリーマン・ミットフォードは蜂須賀茂韶の父・なりゆる齊裕公の招きで一八六七（慶應三）年に阿波徳島藩を訪れている——や、パトリック・ラファディオ・ハーン（Patrick L'acadio Hearn 小泉八雲）など、後述するFolkloreの語を用いた著名なジャパノロジストたちの日本に関する著作を、アメリカの雑誌で論評するな<sup>ら</sup>した（Inouye 1900a, b）。

また、十吉は「日本の伝統文化を海外に紹介」することに精力的で、「これは彼が若い頃から生涯念頭を離れなかったライフワーク」でもあったという（佐光 二〇〇七：三六三）。彼は、「日本人」自らの手で、日本文化を西洋社会へと発信することにこだわった。十吉は海外通の開明的な人物ではあったが——いや、だからこそ——、自己の文化と日本文化が、他者＝西洋人のまなざしにより偏って切り取られ、歪めて客体化される異文化表象に対する危機感を抱き、「日本人」自らが自文化を表象する必要性を痛感していたのである。海外への日本文化の発信に奮闘努力した十吉の姿は、以下のように評されている。

「彼〔十吉——引用者注〕が海外にあったのは、前後二十年に亙るが、その間不満に堪えなかったのは、日本の事情があまりにも外国に知られていないことだった。彼が九歳で留学した明治初年の頃などは、日本の存在さへ徹底せず、支那の一部か何かに考へているものが多かった。自尊心を甚だしく傷つけられる位は、まだ忍ぶにしても、そこから起る誤解が恐しい。それは往々にして国際的感情をさへ損ふ。何年か外交官として生活した経験によっても、日本の真の姿を世界に認識させるのは、重要な仕事でなければならぬ。お互の国民に理解がなくて、国際の平和が成り立つ筈がない。

さう思つてみると、国内に英語を拡めるだけではまだまだ不十分だった。したがって、著書とし、或ひは海外の雑誌への寄稿として、彼は日本を紹介することにたゆまず努力するのであった。英語を剣とし、楯として、実にめざましい奮闘をした人である」（日本英雄傳編纂所 一九三六：四三三）。

十吉は『菅原伝授手習鑑』『仮名手本忠臣蔵』などの古典の一部英訳や、日清戦争の英語戦記（Inouye 1895a）の編纂なども行った。この英語戦記は戦史資料の収集整理等を十吉が担当し、さらに掲載写真類を、当時欧米から新技術を導入した写真家・小川一真<sup>かずま</sup>——宮内省全国宝物取調に参加し、のちに岡倉天心らとともに国華社を設立——が担当したが、この兩名は協力して数点の著作を刊行している。たとえば、イギリスお雇い外国人技師で写真家でもあったウィリアム・キンモンド・バートン（William Kinnmond Burton）とともに、当時では珍しい写真図版入りの『日本の相撲取りと相撲』（*Wrestlers and Wrestling in Japan*）を一八九五（明治二八）年に刊行し（Burton 1895）、そのなかで十吉は相撲の歴史などの解説を担当している。十吉は日本文化の紹介者としての評価が高かったであろう、同書の紹介文でバートンが十吉について、「井上氏の、彼の国の風習や習慣に関する知識はとても博く」（Burton 1895: i）と称賛しているほどである。

十吉は、また同年に『東京生活のスケッチ』（*Sketches of Tokyo Life*）という英書を出版した（Inouye 1895b）。同書の表紙には満開の桜の樹と、日の丸を彷彿とさせる海からの日の出風景といった、西洋人がイメージしやすいステレオタイプ化した日本の象徴物が描かれている。また、落語の寄席や義太夫、歌舞伎、相撲、芸者、占い師、火事と火消し、人力車などといった、これまたステレオタイプ化した日本の象徴物が取り扱われている。同書は、江戸から連なる明治維新後の東京の伝統的な都市文化を、一〇三頁にわたって記録した「風俗誌」であり、folkloreという用語を使用したジャパノロジストであるチェンバレンによっても読まれ、利用されていた——後述する——。

同書の装丁や取り扱った内容は一見して、当時の西洋から日本へのまなざしに迎合したものとも受けとめられるが、十吉の同書刊行の意図は実は正反対のところにあった。それは、日本文化への歪んだまなざしを修正しようと試みたものであった——成否は別として——。十吉は、前書きで「本書でこれ以上詳しく話す必要もないほど、東京は頻繁に描かれてきた。しかし、本書は一般的な誤解〔general misapprehension——引用者注〕を修正してくれるだろう」（Inouye 1895b: iii）と述べている。同書は単に日本文化を解説することを目的としたのではなく、日本の「真の姿」を西洋に伝え、当時往々にしてあった日本への誤解を解くために編まれたのである。彼は、維新後のドラスティックな西洋化

で大きな変革を遂げ、新旧体制、そして進歩主義と保守主義の葛藤が渦巻く東京の「真の姿」を通して、日本の「真の姿」を西洋社会に伝えようとした。同書の前書きでは、「西洋文明」(Occidental civilisation)や「ヨーロッパ文明」(European civilisation)という言葉、そしてそれらに對置される「東洋の心」(Oriental heart)や「東洋の天分」(Oriental instincts)などという言葉を用いており、ヨーロッパ文明に適応しようと汲汲としている日本を東洋のなかで捉え直そうとしていた。これは一九〇四(明治三七)年にアメリカで刊行される、岡倉天心の『東洋の理想』(The Ideals of the East)に見られるアジア主義なども通底するのである。

さらに十吉は、一九一一年(明治四四)年——柳田国男が『遠野物語』を出版した翌年——には、『東京の家庭生活』(Home Life in Tokyo) (Inouye 1911)を上梓している。同書の記述も英文であるが、和紙で綴じられた美しい和装本であり、あえて和風に仕立てたその装丁にも、著者・十吉の同書刊行の意図が込められていると考えるのは穿ち過ぎであろうか。そこには、明治期の東京に住む普通の日本人の衣食住や年中行事、人生儀礼、家族構成、娯楽、祭礼といった生活慣習、伝統が、三〇〇頁以上にわたって記録されている。それは、前著『東京生活のスケッチ』の内容をより拡充した、東京の「民俗誌」ともいえる良著である。同書ではfolkloreという言葉こそ用いられていないが、現代的に民俗として括られる文化や慣習、生活様式が、精緻な図解とともにふんだんに記録されている。それは前著と同じく、あるいはそれ以上に、日本人が日本という自らの国家を強く意識し、その意識のもとで自らの日本文化を自らの眼を通して自覚的に描き出し、積極的に西洋社会に発信し、それによって西洋社会の日本観を修正しようと努めた労作である。

十吉の同書刊行の意図は、次の一文からも理解できる。同書の序文で十吉は、それまでの日本文化の記述の多くが歪んだ異文化表象であり、一方、自らの作品が自覚的になされる新しい自文化表象の試みであることを次のように表現した。

「本書の目的は、私たちが東京の家庭で過している生活について簡明に述べることである。私は、読んで大いに裨益するところのある日本に関する優れた著作が、すでに多く存在することを知っている。しかし、それらの著者は、ほとんどがヨーロッパ人やアメリカ人であり、日本の生活や文明を自ずと西洋の観点 [occidental point of view] 引用者注」から眺めるものであった。日本に関する著作はあり余り過ぎるほどあるけれども、この国の一人のネイティヴ [native] では著者十吉を意味する——引用者注」の手による、日本人の生活に関する記述などほとんど興味を持たれないだろうと、私はふと思う。私が見てきたわが国の人々<sup>オリエント</sup>が書いた英語の著作は高尚な主題を取り扱ってきたが、本書で取り扱うような素朴な物事 [homely matters] 引用者注」を説き起こすことには、目もくれようとしなかった。そのため、この仕事<sup>オリエント</sup>が日本人によって着手された最初のものであると、私は信じて疑わない」(Inouye 1911: 頁未記載、引用者訳)。

この十吉の言葉を、オリエンタリズムの先駆的な批判、あるいは「ネイティヴが自民族や自文化について自らの視点で自らの言葉で語る試み」(桑山 二〇〇八: 三)、すなわちネイティヴ人類学の一連の行為とまで、積極的に深読みすることは少々無理があるに違いない。しかし彼は、留学経験を積み、海外事情や英語に知悉していたがゆえに、当時としては珍しく表象の場における自己——描かれる側——と他者——描く側——との関係性についての確な認識を持っていた。そして、両者のあいだに横たわる乗り越えがたい構造的課題の存在についても、かなり明瞭に自覚していた。また、後の「民俗学」が研究対象として後生大事にする身の回りの卑近な生活文化、すなわち「素朴な物事」を説き起こすことの必要性をも、彼は強く認識していたのである。もちろん、彼を日本のフォークロリストとして位置づけてしまうと、牽強附会の誹りは免れないだろう。しかし彼が、folkloreという言葉に微かながらも直接触れた人物——井上省三——の係累であり、さらにfolkloreという言葉が成長していた一九世紀末のイギリスに同時代的に存在していた事案<sup>オリエント</sup>くらしいは、一瞥しておいてもよからう。

そして、柳田国男が遠野の山の物語を語りて、日本の平地人を戦慄せしめようとしていたのとちょうど同じころ、

William Lengoy, Esq., F.R.S., F.G.S., Lamorna, Corquay.  
 Thurstan C. Peter, Esq., Trengweath, Redruth, Cornwall.  
 C. Pfoundes, Esq., Tokio, Japan.  
 John South Phillips, M.A., Barton Lodge, Bury St. Edmund's.  
 Mrs. W. R. Phillis, 9 Clowerton Terrace, Camden Hill, W.

写真 9-4 イギリス民俗学会設立時の会員名簿に記載された東京在住イギリス人「C. Pfoundes」(東京大学総合図書館所蔵 anon. 1878b: vi より転載)

員名簿には、まず「J. W. MacCarthy, Esq. British Legation, Yedo, Japan」の文字が見える。ここには Yedo (江戸) と記載されているが、一八六三年に江戸は東京に改称されているため、この人物は東京在住と見て差し支えない。この「J. W. MacCarthy」は、外交官・ジョン・ウィリアム・マッカーシー (John William MacCarthy) に比定される。マッカーシーについては、彼と交流があったサトウの日記から知ることができる。

マッカーシーは一八五四年に生まれ、一八七六年から東京のイギリス公使館員となっている。彼が、イギリス民俗学会の会員になったのは、その在職中と思われる。一八七九年から八二年にかけて彼は外務大臣・井上馨の私設秘書を務め、帰国後の一八九六年にはロンドンで弁護士となり、その後中国公使館の法律顧問となった (Ruxton 2010: 147)。マッカーシーは会員名簿上一八八一年までの四年間、イギリス民俗学会員であったことが判明している。ただし井上省三と同じく、folklore をめぐる具体的な活動や著作を見つけないことはできない。

このように、一八七八年のイギリス民俗学会創立時に参画した日本関係者三人のうち二人は、folklore をめぐる具体的な活動は詳らかではない。一方、次に紹介する「二人の東京在住イギリス人」のもう一人——正しくはアイルランド人——は、folklore をめぐってはつきりとした足跡を残している。その人物は、会員名簿に「C. Pfoundes, Esq. Tokio, Japan」と記載されている。チャールズ・ジェームス・ウィリアム・フォンデス (Charles James William Pfoundes 漢字表記: フォンデス、普音天壽、日本名・重井鉄之助<sup>おいてのすけ</sup>) である。

フォンデスは風変わりな経歴を持ち、波瀾万丈の人生を歩んだ人物である。彼は近年、ブライアン・ボッキング (Brian Bocking) や吉永進一、赤井敏夫らをはじめとする近代仏教史、宗教学研究者たちのあいだで注目され、その方面からの詳細な考究が積み重ねられている (Akai 2009; Yoshinaga 2009; Bocking 2013; Turner, Cox and Bocking 2013; Bocking, Cox and Yoshinaga 2014 など)。

folk (fɒk), n. ●【古】人民、國民、人種、種族。●【俗】(sing. は古又は方言)一般の人民、特別階級の人々。●一家又は一族の人々。●【俗】朋友。folk/ˈɔːs/ˈtɒm (-ˈɔːs/ˈtɒm), n. 民俗、民習。folk/ˈet/ˈmɒl/ˈɒɡɪ (-ˈet/ˈmɒl/ˈɒ-ɪ), n. 言葉の意味を明確にする為、其形を變ずること。folk/ˈlænd/ (fɒk/ˈlænd), n. 【古】公有地。folk/ˈlɔːr/ (-ˈlɔːr), n. 民間の傳説・信仰及び習慣、昔話、民俗学。folk/ˈsɒŋ/ (-ˈsɒŋ), n. 民謡(は)俗謡、俚謠。

写真 9-3 井上十吉著『井上英和大辞典』に見える folklore という英単語の翻訳 (東京大学総合図書館所蔵 井上 1915: 734 より転載)

十吉が東京の日常生活を語り、西洋人を戦慄せしめようとしていたことにも注意を払うべきであろう。両者には、「内」に向けた自文化表象と、「外」に向けた自文化表象という大きな懸隔がある。また十吉は、folklore という言葉を直接使用した形跡はない。しかし、十吉の著述活動は、自己の文化を自己で客体化し、自己のアイデンティティを強化する異文化への対抗的行動——ナショナリズムの思想に少なからず浸潤されていた——であり、「民俗学」の世界史から展望すれば、それがイギリスにおけるアイルランド人たちの folklore をめぐる活動と、偶然にも部分的に共鳴していたことが理解される。

十吉が、一九一五(大正四)年に作り上げた『井上英和大辞典』。その七三四頁には、folklore の語が収録されている。そしてその訳語には、「民間の伝説・信仰及び習慣、昔噺、民俗学」(井上 一九一五: 七三四)が当てられている。的確な翻訳である。彼はまた、杉浦重剛とともに一八八八年刊『和訳英字彙——附首插图』(島田豊纂訳、大倉書店)という辞書の校閲者にもなっていたが、その三二一頁には、folklore の文字が収録され、その訳語として「俗伝、野聚」(島田纂訳 一八八八: 三二一)が当てられている。

井上兄弟と folklore という言葉は、細い細い一縷の糸でつながっている。

## 五、忘れられたフォークロリストⅡ——イギリス民俗学会設立と二人の在日イギリス人

さて、次にイギリス民俗学会設立時の会員名簿に記載された「二人の東京在住イギリス人」を見てみよう。その会

彼はその人生のなかで、非常に多彩な活動に関わった。そして彼はその活動に応じて多面的な「顔」を持っていたのだが、その一つとしてフォークロリストとしての「顔」があった。

江戸末期から明治初頭にかけて日本を訪れた多くの西洋人が、日本人、あるいは日本文化をエキゾチックに受けとめ、興味をそそられた反面、一方で少なからずそれらを劣等視していたのとは対照的に、フォンデスは那些人々や文化を——あくまで相対的ではあるが——尊重した人物である。彼は知日派という以上に、むしろ過剰なまでに親日派であったといってもよい。

「今、西洋の近世文明国の道徳上また宗教上の思想を以て、諸君「日本人——引用者注」が所有せらるる所の道徳及び宗教を比較するを、諸君の道徳宗教の方ハルカに優等なる価を持ております。此の点は能く能く注意して其軽重を弁じ取捨を誤らぬ様、皆さん御自身と広く天下万国とを御熟察あらんことを望みます」(フォンデス 一八九三・七、判読の便宜のため句読点を引用者が付加)。

これは、フォンデスが日本で行った演説の一節である。その演説が日本人向けであったことからして、少なからず聴衆を喜ばせ、機嫌をとる世辞が含まれていたことが推察されるが、彼は日本語を駆使する、まさに「日本通」であり、当時の他の西洋人と比べても日本文化に熟知し、そして、それを肯定的に捉えていた。彼の演説集の冒頭解説のなかに、彼が日本文化に精通し、日本人から「信頼」を得ていたことが、次のように表現されている。

「普氏「フォンデス——引用者注」は、曾て久く日本内地に住せしことありしを以て能く日本語に通じ、人情風俗に熟し、日本仏教の要義に通じ、頗る熱心豪邁なる気象を有す。「中略」氏は、日本の事を維新前後へかけて精しく知るが故、日本此頃の書生よりは日本の事情に明かなり。去ば小生よりは遙かに善く日本の事に通ぜり。」(上方の人の気質は如此し)

「北国の人は如此し」「九州四国は如此し」などの話し、また伊藤俊介「伊藤博文——引用者注」井上聞多「井上馨——引用者注」等の諸氏長崎に於て知人なり「中略」氏は能く日本語に通ずるを以て、今迄の西洋人の渡行よりは其功能はるかに多かるべし」(フォンデス 一八九三・一一五、判読の便宜のため句読点を引用者が付加)。

また、一八八二(明治一五)年九月八日の『朝野新聞』では、彼の親日的——親アジア的というべきか——活動が次のように報じられている。

「重井鉄之助と称し、永く我が横浜に滞在し、具に東洋の百芸を穿鑿して方、今本国へ帰られたる彼の英人フォンデス氏は、帰国後類に同志を募り、今度英国に於て東洋学芸研究会なる一社を起し、毎週火曜日を以て會員相集りて日本、支那、朝鮮、琉球、安南、緬甸、暹羅等の言語文物習慣民業學科藝術杯一就演説討論を爲す由て近頃敵社へ其雜誌一部を惠投せられたり氏の日本の文物技芸を稱嘆して其蘊奥を極め、数百里の外に在て東洋の事情を憶想し日本支那等を野蠻視して曾て其實際を知らざる英國人の迷蒙を啓く熱心なるは、夙に世人の知る所にて同氏の實に我東洋社會の良友と云ふべし」

言語、文物、習慣、民業、学科、芸術杯に就き演説討論を爲す由にて、近頃弊社へ其雜誌一部を惠投せられたり。氏の日本の文物技芸を稱嘆して其蘊奥を極め、数百里の外に在て東洋の事情を憶想し日本支那等を野蠻視して、曾て其實際を知らざる英國人の迷蒙を啓くに熱心なるは、夙に世人の知る所にて、同氏は實に我東洋社會の良友と云ふべし」(傍線原典どおり、判読の便宜のため句読点を引用者が付加)。

長きにわたって日本に居住した経験を持つがゆえに、その経験を活かし、「日本支那等を野蠻視し」——實際を知らざる英國人——

○重井鐵之助と稱し永く我が横浜に滞在し具に東洋の百藝を穿鑿して方今本国へ帰られたる彼の英人フォンデス氏の帰國後類に同志を募り今度英國に於て東洋學藝研究會なる一社を起し毎週火曜日を以て會員相集りて日本、支那、朝鮮、琉球、安南、緬甸、暹羅等の言語文物習慣民業學科藝術杯一就演説討論を爲す由て近頃敵社へ其雜誌一部を惠投せられたり氏の日本の文物技芸を稱嘆して其蘊奥を極め数百里の外に在て東洋の事情を憶想し日本支那等を野蠻視して曾て其實際を知らざる英國人の迷蒙を啓く熱心なるは夙に世人の知る所にて同氏の實に我東洋社會の良友と云ふべし

写真 9-5 1882 (明治 15) 年 9 月 8 日の『朝野新聞』に見えるフォンデスの記事 (東京大学近代日本法政史料センター明治新聞雑誌文庫所蔵より転載)

の迷妄を啓く、「東洋社会の良友」たるフォンデスは、この記事が書かれたころ、イギリスでフォークロリストとしても活躍していた。

一八四〇年、南東アイルランドのウォータフォードに生まれた彼は、オーストラリア移住を経て、一八六三(文久三年)、二三歳のときにイギリス海軍の二等水兵として来日する。すぐに日本語を覚え、一二年間にわたってイギリスやアメリカの公使館、さらに日本政府の活動をさまざまな形で手伝った。そして、横浜で発刊されていた英字新聞『ジャパン・ウィークリー・メール』のコラムを一八七〇年代に担当し、日本の芸術や文学、風俗習慣の記事を執筆した(Bocking 2013: 18-21)。

先に紹介したパターンソンが依拠した『ジャパン・ウィークリー・メール』の記事には、フォンデスの執筆記事が含まれていた可能性もある。『ジャパン・ウィークリー・メール』は、一八七〇年に発行が開始され、後述する当時の第一級のジャパノロジストたちによる日本の文化、芸術などの記事や、彼らが組織したジャパノロジーの学会である日本アジア協会(The Asiatic Society of Japan)での講演抄録などを掲載するなど、その時代に日本に滞在したジャパノロジストたちと密接な関係を持っていた。ただし、フォンデスは、日本の表舞台で活躍していた、このようなエリートのジャパノロジストたちのコミュニティとは一線を画していた——むしろ「排除」されていた——ようである。フォンデスは、一八七〇年から七一年にかけて貿易などのビジネスにも携わり、七二年に設立された半官半民の海運会社・日本国郵便蒸気船会社の重役の補佐として任用されたが、その会社が破綻したためか一八七六(明治九)年、三五歳のときに離日した。この離日までの二二年間で、フォンデスは日本の歴史、芸術、文化、習慣、そしてfolkloreに關し幅広い知識を有することとなった(Bocking 2013: 18-19)。

彼は、離日直前の一八七五(明治八)年に、『扶桑耳袋』(Fu-So Mimi Bukuro: A Budget of Japanese Notes) (Poundes 1875)を出版した。それは、『ジャパン・ウィークリー・メール』に掲載した種々の日本関連コラムを再掲したもので、横浜のジャパン・メール社から刊行された。そのため記載内容は概略的ではあるものの、彼自身が直接見聞きした日

本の迷信や宗教、神話、伝説、風俗等々を記録している点で特徴的である。同書自体は必ずしもfolkloreの専門書として編まれたものではない。しかし、それはイギリスから日本への、folkloreという用語と概念の到来を知るうえで重要な手掛かりとなる。

フォンデスが同書を編むにあたって、folkloreという概念と用語を少なからず理解していたことは明白である。実は、フォンデスは同書の説話文学(native literature)を解説する部分において「Folk-Lore」の語を、一語だけではあるが使用したのである(Poundes 1875: 28)。管見のかぎり、これが日本で出版された書籍のなかでfolkloreの語が使用された最初の事例の一つであると考えられる。folkloreへのまなざしは、その語が創造されて二九年後には日本に到達していた。そして、その年は奇しくも日本民俗学の祖・柳田国男が誕生した年でもあった。

professed to render them vehicles of moral teaching. The scene of some of his stories is laid in China. He may be styled the "Scott" of Japan. Tarekico, a contemporary of Bekin, flourished during the last generation. His chief work, "Inaka Genji," a story portraying the times in which he lived, and which was written not long before the opening of the country to foreign intercourse, furnishes an admirable description of the mode of life of the various classes at a recent period. Tarekico was a small *warrior*, and the composition of the work we have named procured him his degradation by the Government. He was reputed to possess considerable ability as author of tales from the native stage which are known as *Shikou-jitai*. The works of Tamenaga Shunkin, which chiefly consist of novels and love tales, are held in considerable estimation by his countrymen. Being modern compositions they afford fair specimens of the production of writers of this class at the present day. The Authors of Legends, Tales of Folk-Lore &c. swell the list of literature to no mean length. Each year sees copious additions to the monstrous catalogue of literary productions, and give much cause to wish that a judicious censorate were in existence. One class of this garbage, which we can only here allude to, is happily dying out, but it is said that one volume of it at least is reputed to confer good luck when kept among the dresses of females.

写真96 1875年刊『扶桑耳袋』(Fu-So Mimi Bukuro)に見える「Folk-Lore」の文字(下線部)(東京大学総合図書館所蔵Poundes 1875: 28より転載)

田 二〇〇九:五六)と誤解されているようである。後述するイングランド人宣教師ジョン・バチェラー(John Batchelor)が、folkloreという用語の日本への紹介者として位置づけられているのであるが、バチェラーの日本での活動は一八七七(明治一〇)年以降のことである。しかしそれ以前に、フォンデスによってその語は日本で開陳されていたのである。

ただし、このフォンデスという人物、そして彼の業績の評価は、当時の日本におけるジャパノロジストのあいだでは、あまり芳しくなかつ

た。たとえば後年(一八八九年)、サトウは、南方熊楠と交友があったことで有名なフレデリック・ヴィクター・ディキンズ(Frederick Victor Dickens)<sup>\*1</sup>に宛てた書簡のなかで、「その人物『フォンデス——引用者注』は山師[charlatan——引用者注]であり、何も知らない。彼は『扶桑耳袋』を著したが、それはまったく価値がない[utterly valueless——引用者注]」(Ruxton 2008: 127)と酷評しているほどである。しかし、一方で『扶桑耳袋』は、多くの読者を持っていたともされる。たとえばイギリスの軍艦設計技師エドワード・ジェームス・リード(Edward James Reed)が著した『日本: その歴史、伝統、そして宗教、一八七九年の訪問記とともに』(Japan: Its History, Traditions, and Religions, with the Narrative of a Visit in 1879) (Reed 1880)では「フォンデスの著作の事例が多用されている」(Bocking 2013: 35)。

また同書は「英語圏のみならず同時代の他言語の文献にも影響を与えた」(廣田 二〇一五: 五七)ようである。たとえば、革命思想家で、のちに東京外国語学校(現・東京外国語大学)のロシア語教師となったロシア系ジャパノロジストのレフ・イリイチ・メーチニコフ(ロシア語名 Лев Ильич Мечников フランス語名 Léon Metchnikoff)は、その著書『日本帝国』(L'empire Japonais) (Metchnikoff 1881)に『扶桑耳袋』から「迷信」に関する記事を数多く引用し、多くの情報収集に努めたフォンデスを称賛しているという(廣田 二〇一五: 五七)。

一八七六年に離日後、フォンデスはアメリカに渡って自ら収集した日本の美術工芸品を販売したり、講演をしたりした。そして一八七七年にかけて、彼は東西ヨーロッパ各地をめぐり、イギリスへと帰国する。彼がイギリス民俗学会創設時の会員となったのは、ちょうどその時期である。創立時の会員名簿には居住地が東京と記載されていたが、実際はすでに離日していたはずである。七九年にはロンドンのCustom House、八〇〜八二年はロンドンのCleveland Place, St James'sに居住していたことが、それぞれの年度の会員名簿から判明している。

フォンデスはイギリス帰国後の一八八〇年代には、海軍に書記として務める傍ら、folkloreを含む日本文化の講演を行っていたという(Bocking 2013: 19-20)。彼はサトウら同時代のジャパノロジストのように、大学などでのエリー

ト教育、専門教育を受けていなかった。folkloreという言葉と、いつ、どこで接し、どのようにして学んだのか詳らかではない。しかし、彼の初期の活動を理解するうえで、このfolkloreという言葉は重要なキーワードの一つとなる。若き日のフォンデスの姿を、フォークロリストと表現しても何ら差し支えなく。

イギリス民俗学会が設立された一八七八年に、同学会はThe Folk-Lore Record(一八七八〜八二)という学会誌を刊行する。本誌は、後継誌のThe Folk-Lore Journal(一八八三〜八九)のFolklore(一八九〇(現在)と引き継がれる世界最古級の民俗学専門誌である。同誌の記念すべき創刊号には、トムズやラングといった学会設立に関わった錚々たるメンバーが寄稿している。また、それ以外にフランスやイタリアのfolkloreの論考、さらにアメリカの先住民ピグマティ族などのイギリス外のfolkloreの論考が掲載された。そして、そのなかの一つとして日本のfolkloreの論考も掲載された。その著者が他でもない、このフォンデスだったのである。

創刊号の一八頁から一三五頁にわたって、「いづくかの日本昔話」(Some Japan Folk-Tales) (Foundes 1878)と題する論考が掲載された。イギリス民俗学会の設立時に、イギリスにおいてすでに日本文化がfolkloreとして括り出され、収集されていた。ただそれは論考とはいっても、下記のような日本の民間文芸——話をまとめて記録し、翻訳紹介したもので、解釈や分析などは行われていない。

おんおん茶釜 The Bewitched Tea-Kettle (pp. 118-119)

しんべい太郎 Shippei Taro, the Dog That Rescued the Maiden from Sacrifice (pp. 120-121)

スサノオとオロチ Susa No and the Orochi (pp. 122-123)

桃太郎 Momotaro (pp. 123-125)

浦島太郎 Ura Shima Taro: His Visit to the Home of the Sea-Dragon (pp. 125-126)

海幸彦・山幸彦神話の第一部 The Lost Fish-Hook (pp. 126-129)

- 玉藻前と九尾の狐 Tama Mono Moyo. The Fox with the White Face and Nine Tails (pp. 129-130)  
佐用姫伝説 The Loving Wife (p. 131)  
舌切り雀 The Sparrow's Wedding (pp. 131-133)  
自責の念(怠け者の改心譚) A Guilty Conscience (p. 133)  
鉢かゝり姫 The Maid Whose Face Was Hidden under a Bowl (pp. 134-135)

「スサノオとオロチ」や「佐用姫伝説」のように、記紀神話や風土記、お伽草紙に記載された著名な話が収載される一方で、「自責の念(怠け者の改心譚)」のように一般には流通していない個別的な説話も含まれている。これらの民間文芸が、どこで、どのように発見され、どのように収集されたのか、具体的な経緯は不明である。また、その資料的価値はそれほど高いとは思われない。しかし、日本のfolkloreが世界最初の民俗学専門誌に掲載され、イギリスで紹介されたという歴史的意義以上に、その著者がそれらの事例を直接日本に赴いて収集していた点には意義を見出してもよいだろう。

上述したように、一八七三年、『ノーツ・アンド・クエリーズ』にfolkloreという語を用いて日本文化を紹介したパターンソンは、自らはイギリスに在住しながら、船で運ばれてきた他の人が書いた日本の英字新聞を読み、その記事を引き写したに過ぎない。だが、フォンデスは、日本で自らが見聞きした民間文芸類を、自ら直接イギリスへ届け、folkloreをめぐる学究の組上に載せたのである。

さらにフォンデスは、民俗学の専門雑誌に寄稿したこの時期に、folkloreという文字を表題に付した日本文化に関する世界最初の書物を著すという野心的な試みを企てた。それは、一八九二年にアメリカ出身のお雇い外国人教師で東洋学者であったウィリアム・エリオット・グリフィス(William Elliot Griffiths)が、『歴史・民俗・芸術のなかの日本』(Japan in History, Folklore and Art)と、表題にfolkloreの語を付す日本関係著作をアメリカ・ボストンで出版した一三年

前、そして、次いでイギリスの旅行家で博物学者であったリチャード・ゴードン・スミス(Richard Gordon Smith)が一九〇八年に『日本の昔話と民俗』(Ancient Tales and Folklore of Japan)をロンドンで出版した、ほぼ三〇年も前のことである。

一八七九年に刊行されたThe Folk-Lore Record二巻の学会の「通知とニュース」欄において、『古き日本の民俗——日本について覚書の束』(The Folk-Lore of Old Japan: A Budget of Notes about Nippon)なる書物が、フォンデスによって刊行される予定である旨、告知された。その告知文により、同書の刊行の意図が理解でき<sup>※20</sup>る。

「イギリス民俗学会——引用者注」学会員であるC・フォンデス氏は、The FOLK-LORE of OLD JAPAN: A Budget of Notes about Nipponと云ふ著作を Griffiths & Farran 社から近日刊行予定である。フォンデス氏は、一二年以上も日本人とともに暮らして、日常会話を習得した。そして、その国における知的階級のネイティヴの生活[Native life——引用者注]を過<sup>り</sup>してきた。folkloreを主導する權威の分類法をうまく取り入れながらも、フォンデス氏は、他の人々をこのもつとも捻<sup>り</sup>多き学問の一分野 [folklore——引用者注]の理解へと誘<sup>う</sup>ことを希望するがゆえに、余すところのない徹底したコレクションなどという<sup>こと</sup>ではなく、ネイティヴの文学者や彼自身の観察から得られた特徴的な実例を簡潔にもたらず<sup>こと</sup>を明言<sup>して</sup>する」(anon. 1879: 230 引用者訳)。

この告知文は、フォンデスが日本での長期にわたる生活によって、その言語を習得し、ネイティヴ＝日本人の生活文化に知悉している点において、彼が日本文化を描くことの適任者であることをまずは強調する。そのうえで、彼の業績が当時のfolklore研究の文脈にあることで權威性を示し、同書が単なる日本文化の考究の書であるだけではなく、folkloreという学問への誘いの書であることを強調している。それは、従来の二次資料を用いた伝聞型の研究ではなく、ネイティヴの記述と「調査者」自身の直接観察を基盤とした一次資料を用いた研究として、当時、斬新な試みとなる



はずであつた……。そして、それはさらに表題に *folklore* の文字を付した日本文化関係の世界最初の著作として、学史にその名をとどめるはずであつた……。

しかし、残念なことに、同書が実際に出版された形跡は見当たらない。何らかの理由で、出版が断念されたものと思われる。それが「幻の書」となつてしまつた理由は、判然としない。ただ、その野心的書物のタイトルが日本で出版した『扶桑耳袋』と酷似しているところから、内容的に重複のある類書であつたことが問題であつた可能性がある。さてフォンデスは、このように一八七〇年代末からイギリス民俗学会の学会誌に投稿し、日本関係の *folklore* の著作を出版しようとして計画しただけではなく、その学会の年次大会に出席するなど、積極的にイギリス民俗学会員としてフォークロリストとしての活動を行つていた。一八八〇年六月二三日に王立アジア協会 (The Royal Asiatic Society)<sup>\*21</sup> の一室で第二回イギリス民俗学会年次大会が開催され、その総会でさまざまな議案が発議され可決されたが、フォンデスはその場で二つの事案の発議者となつてゐる。まずは、その年の学会監査役選任事案を提案し会員から可決され、学会総会の最後では、名誉幹事であつたゴナムが学会活動へ尽力したことに対して感謝する決議案を提案し、満場一致で可決された (anon. 1880a: 112)。

イギリス民俗学会は上記のような年次大会以外に、論文発表と討論を行うイブニング・ミーティングをほぼ毎月開催したが、一八八〇年一月二日、二月一日、翌八一年四月二二日開催ミーティングの討論に、ゴナムやタイラーたちとともにフォンデスが参加し、また一八八一年六月二三日に開催された第三回イギリス民俗学会年次大会総会では、評議会によつて組織された種々の議題を報告決議する委員会のメンバーに彼は加えられ、前年に引き続き議題提案者となつた記録が残つてゐる (anon. 1881: 205-223)。フォンデスは、イギリス民俗学会の研究ミーティングでの議論に積極的に参加し、そして、イギリス民俗学会評議会の役員ではなかつたものの、学会運営において委員会に加えられ、議事提案を行うなどの「役回り」を与えられるほどのフォークロリストとしての立場を築いてゐたことが推し量られる。

ところが、フォンデスのイギリス民俗学会における消息は、一八八一年二月一六日のイブニング・ミーティングを最後に突然途絶えることとなる。また一八八三年以降の会員名簿からその名が消えることから、八二一八三年あたり、フォンデスはイギリス民俗学会を退会したものと推測される。退会の理由は定かではないが、そのころのフォンデスの活動が、あまりにも多分野に広がりすぎたことに、その一因があるのかもしれない。

一八七〇年代末から八〇年代初頭のほぼ五年間、彼はフォークロリストとしての活動を活発化させた。だが、それは実は彼の多彩な活動の一つに過ぎなかつた。彼は、パーミンガムの学校で日本の美術史について講演したり (anon. 1880b: 19)、イギリス・アイルランド王立人類学協会 (Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland) —— 一八七一年に創立された世界最古級の人類学会 —— の機関誌に、日本人起源論の論考 (Poundes 1881) や、古

き日本の儀礼や習俗に関する論考 (Poundes 1883) を発表したりするなど、*folklore* に限らず多岐にわたつた学問の分野に参画し、顔を出し、活躍してゐた。彼は、フォークロリストであると同時に芸術史家でもあり、東洋学者でもあり、アンソロポロジストでもあつた。

上記一八八一年の人類学の論考に記載されている彼のプロファイルによると、フォンデスは王立地理学協会や王立植民地協会、王立アジア協会、王立歴史協会、芸術学会、香港の日本協会等々のメンバーでもあつたとされる (Poundes 1881: 225)。近代的なアカデミックの世界がイギリスで形作られる一九世紀後半というこの時期に、フォンデスは、その世界との関わりを希求し、奮闘してゐたことが彼の足跡から思はれる。



CAPTAIN PFOUNDÉS.

写真 9-7 僧衣に身を纏っているフォンデスの肖像 (東京大学総合図書館所蔵 Pfoundes 1905: 316 より転載)

さて、フォンデスは上記のような学究活動を行うとともに、一八七六年離日後のアメリカ滞在以降、さまざまな宗教を融合した神秘主義に基づく神智学 (Theosophy) や、それと関連して仏教などの宗教に目覚めていく。そして、彼はのちに宗教家として活動するのである。一八八九年のロンドンで彼は、日本仏教の海外宣教会 (The Buddhist Propagation Society) を結成し、イギリスへの伝道活動に参画した。これは西洋社会への仏教伝道史上、一大画期である。彼は日本滞在中に、すでに仏教への関心を深めていたようで、著作『扶桑耳袋』でも仏教に関して多くの紙幅が割かれている。また、彼は海外での東洋学会の会議に参加したり、国際博覧会の日本開催を画策したりしたが、それらはいずれも成功することはなかった (Bocking 2013; Bocking, Cox and Yoshinaga 2014)。

一八九三 (明治二六) 年、フォンデスは海軍のポストを失い、失意の下に日本へと再来日する。そして彼は、当時の西洋人が主として交流した日本のエリート層のみならず、一般大衆に向けても、仏教に関する講話を行った。ただ当初は、西洋の仏教伝道者という立場でキリスト教に対抗するスポークスマンとしても囃されたものの、奇行奇癖もあり日本の後援者 (仏教界) から徐々に見放され、彼は零落していく。そして晩年には神戸に居住し、仏教僧になり、また東洋学者情報機関 (Orientalists' Intelligence Agency) を名乗って、日本ガイド、通訳、旅行コンパニオンなどの種々雑多な仕事に携わった。そして、一九〇七 (明治四〇) 年に、神戸でその数奇な人生の幕を閉じた (Bocking 2013; Bocking, Cox and Yoshinaga 2014)。

以上のように、野心的で多面的な「顔」を持つフォンデスを、狭くフォークロリストという範疇にのみ、封じ込めることは妥当ではなからう。大局から見れば、彼の知的営為は、一九世紀後半の学問未分化のアマルガムであった好古学の系譜に連なるのであり、その系譜は日本の南方熊楠——これもまた多面的な顔を持つ——などにも引き継がれているのである。

フォンデスは確かに風変わりで、山師的であった。彼は、当時のジャパノロジイで活躍した紳士たちとは異なり、エリート教育を受けていなかった。そして、そのエリートのジャパノロジストたちから疎まれていた。また、イギリスにおいて支配され、圧迫されていたアイルランド人であった。このような彼の性格や生い立ち、そして周縁的な立場性が、当時、西洋と比して劣位に扱われていた日本やアジアの人々や文化に、彼が少なからず共感を抱き、そちら側に立って活動する原動力となったのかもしれない。

フォンデスの多彩な経歴の重要な一部に、フォークロリストとしての履歴が埋め込まれていたことは間違いない。彼は、イギリス民俗学会において、日本研究のスペシャリストとして活躍した最初のフォークロリストなのである。だが残念なことに、フォンデスは、いまや日英両国の「民俗学」史上「忘れられたフォークロリスト」となり、さらに日本研究史上「忘れられたジャパノロジスト」となってしまったのである。

## 六、ジャパノロジイとフォークロア

日本を舞台としてなされた西洋人による民俗の発見、収集、記録は、一六世紀半ばに日本を訪れたルイス・フロイスなどの宣教師の記録や、一七世紀末来日のエンゲルベルト・ケンペル (Engelbert Kaempfer) や、一八世紀中葉来日のカール・ペーター・ツンベルク (Carl Peter Thunberg) 一九世紀初頭来日のフィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルト (Philipp Franz Balthasar von Siebold) などのオランダ商館関係者の記録に、その一端を垣間見ることが出来る。幕末から明治初頭になると、さらに多くの西洋人が日本に来訪し、日本で民俗を発見、収集、記録した。一八五五年には、オランダのライデン大学に日本学科が創設されるなど、西洋人が日本を考究するジャパノロジイと呼ばれる知的営為が、この時代のヨーロッパに萌芽する。それは日本が徐々に国を開くことによって、それまで矚目とした輪郭でしか捉えられなかった異邦の未知の情報も西洋へともたらされ、また、人的な交流が格段に進展したことが最大の理由である。地球の裏側から運ばれた「不思議の国・日本」の屢報に接して、西洋社会は驚かされ、そして西洋人の好奇心はかき立てられた。

また、このジャパノロジーが萌芽したのと同じころ、一八六二年のロンドン万国博覧会、一八六七七年のパリ万国博覧会などの国際博覧会を通じてヨーロッパで日本の工芸品が展示され、西洋の人々の注目を集めた。そして、日本では「あたりまえ」のものとして打ち捨てられつつあった浮世絵などの日本の伝統美術品や文物が、商品としてヨーロッパへと大量流入——日本から見れば大量流出——した。そのような文化状況を背景に、日本文化はヨーロッパのアーティストたちの耳目をひき、美術界にジャポニスム運動が隆盛したのである(楠家 一九九七:五五)。ジャポニスムとジャパノロジーは、同じ時代に同期した<sup>シンクロニクス</sup>一体の文化現象であるといえる。

謎のベールに閉ざされていた日本文化が、そのベールを剥ぎ取られることによって、欧米の学問や芸術の世界で一躍脚光を浴びた。一八六八年にフランス印象派の画家エドゥアル・マネ(Edouard Manet)は、「エミール・ゾラの肖像」画を描いた。高名なフランス自然主義文学者の肖像の背景には、浮世絵が忍び込まれている。このように日本文化が西洋人に親しまれるこの時代に、奇しくもfolkloreという新しいまなざしが、ヨーロッパの文化表象の世界に浸透していた。このfolkloreというまなざしがジャパノロジーのなかに忍び込んでいたとしても、何ら不思議なことではない。

この時期、お雇い外国人教師や外交官として来日した西洋知識人が、日本の歴史や文化に関心を持ち、ジャパノロジストのコミュニティーを日本で形成し、日本におけるジャパノロジーを展開する。そして、その日本在住のジャパノロジストの一部が、日本文化の発見、収集、記録活動のなかでfolkloreという用語を使用していた。

初代イギリス公使ラザフォード・オールコック(Sir Rutherford Alcock)が、一八六三(文久三)年に「大君の都」(*The Capital of the Tycoon: A Narrative of a Three Years' Residence in Japan*) (Alcock 1863)を上梓し、日本の風俗習慣を海外に紹介した。また、King's College London教授ジェームズ・サマーズ(James Summers)は、一八七三(明治六)年に東京開成学校のお雇い外国人教師として来日するが、その来日前の一八六三〜六五年にかけて、「支那日本雑纂」(*The Chinese and Japanese Repository*)を編集した。その第三巻では、「繪本太閤記」からの引用翻訳「妖精の狐」(*The*

*Elfin Foxes*) (Summers 1865: 1-8)という、日本の説話が掲載されている。さらに、サマーズは一八七〇〜七三年に雑誌*The Phoenix*を刊行し、それにサトウやアストンら著名なジャパノロジストが投稿している。

たとえば、一号の巻頭記事はサトウによる論文「蝦夷のアイヌ」(*The Ainos of Yezo*)であり、サトウはそのなかで函館の近くで出会ったアイヌの人々の衣食住について紹介している。また一八号では、先述した菊池大麓——のちに坪井正五郎の義兄となる——がイギリス留学中に日本の昔話「狐と熊」(*The Fox and the Badger*)を掲載し、二〇号からアストンが、「二人の日本人の監修の下」集められた「日本のことわざ」(*Japanese Proverbs*)を連載したという(中川 二〇〇八:一〇八—一一)。サトウやアストンが、その後、民俗と括りうる文化を含む日本文化関連の多くの著作を世に問うたことは、周知のとおりである。

一八七一(明治四)年になると、日本の風俗習慣に特化した重要な著作が登場する。やはりイギリス外交官だったアルジャーノン・バートラム・フリーマン・ミットフォード(Algernon Bertram Freeman-Mitford)は、「古き日本の物語」(*Tales of Old Japan*) (Freeman-Mitford 1871)をロンドンで刊行し、そのなかで忠臣蔵などの戯作類、桃太郎や金太郎など日本の多くの昔話、伝説を収集し、豊富なイラストとともに記録している。また本書には、そのような口承文芸とともに、当時の婚姻、誕生、葬送儀礼などの生活習俗が数多く記録されている。フリーマン・ミットフォードはfolkloreの語を同書では使用しておらず、彼がfolkloreという概念を認識していたかどうかは不明である。しかし同書は、イギリスにおいて「そのオリジナルが出版されて以来、日本のfolkloreと慣習についての標準的な情報源」<sup>22</sup>となったのであり、現在復刊されている同書には「Folklore、民話、怪談、そしてサムライの伝説」(Folklore, Fairy Tales, Ghost Stories and Legends of the Samurai)と二つの副題が付されるほどである。

さて、上記したジャパノロジストたちの著作では、いわゆる日本の風俗習慣が描かれることはあっても、folkloreという概念によって文化のある部分を括り取る認識をそこに直接読み取ることはできない。一般的な文化記述である。だが、その後のジャパノロジストたちは、イギリス「民俗学」との接触を通じて、folkloreという概念と用語に目覚

めていった。

ジャパノロジーが発展し、研究や著作が積み上げられるなか、一八七二（明治五）年には、在日イギリス人を中心として日本アジア協会（The Asiatic Society of Japan）が設立された。それは、在日外国人が日本についての知識や情報を収集するための組織であり、また西洋へ、その知識や情報を伝達するための組織であった。そこにはエリート外交官や宣教師、実業家などが集い——そこに上述のフォンデスの姿はなかったが——、歴史や文学、芸術から自然科学にわたって日本を舞台とする多様な研究が、ジャパノロジーという地域研究として執り行われた。

その中心メンバーであったサトウは、日本の風俗習慣への造詣が深かったものの、folklore という言葉や概念を、あまり積極的には用いてはいなさそうである。また、イギリス民俗学会などのfolkloreをめぐるコミュニティ、およびそこでの活動にも直接参画した形跡は見当たらない。しかし彼の名前が、その後のfolkloreという言葉を書名に付した著作（Griffis 1892: 151, Smith 1908: vii）に登場し、著者たちが彼の情報提供、あるいは情報収集への助力に対して丁寧な謝辞を述べていることから、サトウの周辺でfolkloreという言葉と、それをめぐる活動が交錯してことは確実である。

サトウのすぐ近くにいた当時のジャパノロジストたちのなかで、最初にfolkloreへのまなざしを持ったのはチェンバレンであったと思われる。イングランド生まれの彼は、一八七三（明治六）年に来日し（二九一年最終離日）、東京帝国大学などでお雇い外国人教師となった。日本・アイヌ・琉球の言語と文化研究、そして俳句や『古事記』などの英語翻訳で著名なジャパノロジストである。チェンバレンの著作が、先に紹介したプラット——『ノーツ・アンド・クエリーズ』に日本関連記事を寄稿した人物——ら「アームチェア・フォークロリスト」たちの、イギリスにおける日本文化表象の重要な情報源であったことはすでに述べたとおりである。日本にいたチェンバレンの著述は、イギリスでfolkloreに関心を持っていた人々に、熱心に読まれていた。そして、チェンバレン自身もまた、イギリスにおけるfolkloreの考究の活動に直接参画したのである。

チェンバレンは、一八八八（明治二一）年、当時のイギリス民俗学会の学会誌 *The Folk-Lore Journal* (*The Folk-Lore Record* の後継誌) の六巻一号に「アイヌの民俗」(Aino Folk-Lore) (Chamberlain 1888a) を発表した。その末文によれば、それは前年の一八八七年七月二〇日に箱根・宮ノ下で脱稿したものである。それは数回にわたるアイヌ語調査のなかで集積されたアイヌのfolklore<sup>1</sup> 口承文芸を整理したものであった。この論考は、イギリス民俗学会でいろいろな意味で注目されたようである。

本論考に、イギリス民俗学会は「一部削除」する旨の注記を付け加えた。そして、収載予定の全五四話のうち一〇話を削除してしまった。その注記は、「アイヌ人の想像力は、ゾラと同じくらい好色で、またそれ以上に露骨である」(The Aino's imagination is as prurient as that of any Zola, and far more outspoken.) (Chamberlain 1888a: 5) という、チェンバレンの差別的な文章の後に付されている。ここで好色とされる「ゾラ」とは、エミール・フランソワ・ゾラ (Emile Francois Zola) のことであろう。ゾラは、先に紹介したマネ作の肖像画に浮世絵とともに描かれた人物であり、一九世紀後半に活躍したフランスの高名な小説家である。自然主義の立場から、人間の動物性を赤裸々に暴き出したフランスの奔放な「作家」は、当時のイギリスの「紳士」たちから毛嫌いされていたと思われる。チェンバレンは、異文化を自文化の尺度で評価し否定するという、まさしく異文化表象の偏見を露呈させてしまった。

一方、一部削除するという対応をとったイギリス民俗学会も、実は同様の価値判断を下していた。この削除は、チェンバレンの差別的表現を問題視してなされたのかと思いきや、なんと反対にアイヌの口承文芸の内容を問題視し、雑誌に掲載するに相応しくないと判断に従ったものであった。<sup>2</sup> その判断は、アイヌの権利や地位を慮り、尊重し、そしてそれを擁護するためになされた配慮ではまったくない。

ところがさらに、イギリス民俗学会評議会は、「科学的な目的」から鑑みてその削除した口承文芸の意義を認め、保存されるべき完全なコレクション五四話を、会員限定の私家版として発行することを決めてしまった。そして、上記論考が出た同年の一八八八年に、『アイヌの昔話』(Aino Folk-Tales) (Chamberlain 1888b) と改題し、五七頁の小

冊子の形でイギリス民俗学会から刊行したのである。その冊子の冒頭で、進化主義人類学の権威で、当時イギリス民俗学会の副会長を務めていたタイラーが、長文のイントロダクションを寄せるほどの厚遇ぶりであった。文章を削除されたチェンバレンも、削除されたことに不満を持った形跡はない。むしろ、単行本として限定刊行されたその処遇に、さぞかし満足したことであろう。その小冊子を精査すると、表紙には *Aino Folk-Tales* の表題が付されているものの、各頁の柱には *Aino Folk-Lore* と印刷されており、また、そのページデザインは *The Folk-Lore Journal* とまったく同じである。このことから、一度すべての口本文芸を含んだ完全コレクション版を印刷してしまったが、刊行間際になって民俗学会の評議会内で内容が問題視され、学会誌では一部原稿を削除した論文「アイヌの民俗」(*Aino Folk-Lore*) に差し替えて公開し、そしてすでに印刷されていた版を使って『アイヌの昔話』(*Aino Folk-Tales*) を限定版として刊行したと見なすのが妥当であろう。

異文化を否定し、その記述を削除した行為は、一九世紀当時の西洋社会に存在した偏った倫理意識や通念に起因するのである。一方、一度否定したはずの異文化記述を「科学」の名目で復活させ、仲間内に流通させる行為は、当時の進化主義という歪んだ学的潮流から理解できるであろう。タイラーのイントロダクションから、当時の *Folklore* の周りを取り巻いていたアンソロポロジストやフォークロリストたちが、アイヌ文化に関して驚くほどの知識を有し——当然ではあるが当時の日本人以上に——、それへ驚くほどの執着心を持っていたことが理解される。それは、その異文化を人類進化の「ある」一段階として妄想したためであり、進化主義的理解を深める興味深い資料的価値をそこに妄想したためであった。

また、イギリス人に限らずヨーロッパ人が、アイヌをヨーロッパ人の系譜に連なる人々と通俗的にイメージし——エルヴィン・フォン・ヘルツ (*Erwin von Hertz*) が唱えたアイヌ白人説など——、自らに連なる「高貴なる野蛮人」とエキゾティックに幻想していたことも、その理由に含まれるであろう。このアイヌ白人説も、「高度」なヨーロッパ社会の発展段階を説明する、進化主義的研究の重要な説明回路たりうるのである。このようなヨーロッパにおける

幻想とパラレルに、同時代の日本在住のジャパノロジストたちのあいだにも同様の幻想が渦巻いていた。そのため明治時代に来日した西欧人学者にはアイヌに関心を示した人物が案外と多い(楠家 一九九七:三四三)のである。日本とイギリスとに遠く離れていても、*Folklore* をめぐる運動に関わっていた人々は共通の関心でももつながら、異文化を自文化との対比において劣位に扱いつつながら、一方で科学の名の下に研究対象として重視するというアンビヴァレントな進化主義のパラドックスに、ともに陥っていたのである。

チェンバレンは、その後アイヌ文化だけではなく、日本文化にも *Folklore* のまなざしを注ぎ込む。彼が一九九〇年に初版を出版した『日本事物誌』(*Things Japanese: Being Notes on Various Subjects Connected with Japan, for the Use of Travellers and Others*) (*Chamberlain* 1890) は、その後一五年にわたって第六版まで改訂重版されるほどのベストセラーとなった。日本語にも翻訳された同書は、日本の文化(アイヌ文化も含む)の種々のトピックをアルファベット順に配列し、解説した日本文化の百科事典である。そのなかの推薦図書(各版によって増補改訂されている)に *Folklore* の語が登場し、また「仏教」(*Buddhism*) の項目で、日本の仏教が日本のさまざまな文化に影響を与え、日本の *Folklore* の形成にも大きな役割を果たしたことが言及されている (*Chamberlain* 1891: 71)。

また先述したように、同書でチェンバレンは、*Folklore* とどう言葉と細い一縷の糸でつながる井上十吉の著書『東京生活のスケッチ』(*Sketches of Tokyo Life*) を推薦図書として紹介し、日本文化の解説に利用している。たとえば一九〇二年刊の『日本事物誌』第四版の「相撲」(*Wrestling*) の解説 (*Chamberlain* 1902: 510-511) や、一九〇五年刊第五版の「芸者」(*Singing-girls*) の解説 (*Chamberlain* 1905: 433-434) に、チェンバレンは同書を利用し、推薦図書としているのである。

さて、チェンバレンが「アイヌの民俗」(*Aino Folk-Lore*) の論考をイギリス民俗学会に発表した一八八八年に、イングランド人宣教師ジョン・バチエラーもアイヌ関係の論考を、同学会で発表している。一八七七(明治一〇)年からアイヌ社会に伝道を開始したバチエラーは、その文化や言語の研究も推進し、数多くのアイヌ関係論著を残した。

彼は *The Folk-Lore Journal* 六卷三号に「アイヌの民俗の標本」(Specimens of Ainu Folk-Lore) (Batchelor 1888a) を発表した。

同論考は、日本で展開されていたジャパノロジと、イギリスで展開されていた *Folklore* 研究とが強固に取り結ばれ、日本に興味津々であったイギリスに、その情報がことのほか迅速に伝達されていたことを如実に示す好例である。日本在住のジャパノロジストたちの研究動向は、イギリス民俗学会で逐次把握され、その研究はイギリスのフォークロリストたちに関心を持たれていたのである。バチエラーは一八八八年三月一日、一八八九年二月四日、一八九二年四月二十八日の三回にわたって、日本アジア協会の例会で発表した。それぞれの原稿は、協会誌 *Transactions of the Asiatic Society of Japan* の一六巻二号 (Batchelor 1888b)、一八巻一号 (Batchelor 1890)、二〇巻二号 (Batchelor 1893) で、同一のタイトル「アイヌの民俗の標本」(Specimens of Ainu Folk-Lore) とし、つぎ物として掲載された。<sup>※</sup>

*The Folk-Lore Journal* 六巻三号に掲載された論考は、このうち一八八八年三月一日に行われた発表の内容である。その執筆者はバチエラーと記載されるものの、内容は *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 一六巻二号の発表原稿とは大きく異なっており、またその記述は、バチエラーの発表を第三者がまとめた抄録となっており、実際の執筆者はバチエラーではない可能性が高い。いずれにせよ、日本で発表されたプレゼンテーション<sup>※</sup>の内容が、わずか半年ばかりのちにはイギリス民俗学会の機関誌において活字化され、紹介されていたのである。当時、すでに電信による海外との通信が可能になっていたとはいえ、この情報伝達の早さには驚かされる。

バチエラーは、その後一八九二(明治二五)年に『日本のアイヌ』(*The Ainu of Japan*) (Batchelor 1892) を出版し、そのなかでも *Folklore* の語を使用し、また、一九〇一(明治三四)年には『アイヌとその民俗』(*The Ainu and Their Folklore*) (Batchelor 1901) という六〇頁以上の大部のエスノグラフィを著すなど、*Folklore* をめぐる活動を継続した。そして、バチエラーのその活動はイギリス民俗学会だけでなく、アメリカ民俗学会にも広がっていった。

一八八八年、イギリス民俗学会に遅れること一〇年後、アメリカ民俗学会 (American Folklore Society) が設立された。同学会は設立時より *Journal of American Folklore* という学会誌を刊行しているが、その七巻二四号にバチエラーの「アイヌ民俗の種目」(Items of Ainu Folk-Lore) (Batchelor 1894) が掲載されている。当時のアメリカ民俗学会には、先に紹介したグリフィスなども参加していた。たとえば一八九二年五月に開催されたアメリカ民俗学会ボストン協会の月例会の、原始宗教の世界的な類似性に関する発表の討論の席上で、グリフィスや、当時すでにアメリカに帰国していた元お雇い外国人教師のアメリカ系ジャパノロジストであるエドワード・シルヴェスター・モース (Edward Sylvester Morse) ——大森貝塚の発掘で著名——らが、日本の民俗について開陳している (anon. 1892)。一九世紀末に日本の *Folklore* は、イギリス系を中心とするジャパノロジスト、そしてイギリス在住のフォークロリストにとどまらず、アメリカのフォークロリストのあいだでもその議論の俎上に載せられていたのである。さらにこのネットワークの拡大状況は、当時の西洋社会全体の状況として捉えられる可能性もある。<sup>※</sup>

最後に、サトウ、チェンバレンと並ぶ三大ジャパノロジストの一人であるアストンについて見てみたい。アストンもまた、*Folklore* という語を使用したジャパノロジストの一人である。

アストンは、一八四一年にアイルランドのロンドンデリーで生まれ、Queen's College, Belfast で現代史や文献学の高等教育を受けた後、一八六四年にイギリス外務省の通訳生として来日し、その後、神戸の領事を務めた。そして、サトウと同じく外交官として活躍する傍ら、日本語研究を行った。彼はアイルランド出身ではあるが、アングロ・アイリッシュ (Anglo-Irish) であった (榎家 二〇〇五:一九)。アングロ・アイリッシュとは、祖先がイングランドからの入植者で、宗教的にはプロテスタントであり、アイルランド社会を支配したプロテスタントの土地持ちのエリートたちの特権階級であった (栗原 二〇〇八:二五)。

ちなみに、ハーン (小泉八雲) の父は、アングロ・アイリッシュであった。またアイルランドの地域文化を記録し、日本にも関心を持ったパターンソンもアングロ・アイリッシュの方言について記録しており、自らアングロ・アイリッ

シユであつた可能性もある。さらに、フォンデスの父もプロテスタントであり、このアングロ・アイリッシュであつた可能性がある。

アングロ・アイリッシュのなかには、先に紹介したアイルランドの文芸復興運動を主導したイエイツのように、アイルランド民族主義に傾倒し、独立を志した者たちもいた。一方、このアングロ・アイリッシュからは、イングラドへの帰属意識からアイルランド独立に反対する立場をとり、イギリスの政府や軍に身を投じる者も輩出した。アストンは後者であつたことが推察される。

アストンは、一八八九(明治二二)年の離日後、アイルランドへは戻らずイングランドで余生を送り、一九一一年に他界した。彼の *folklore* をめぐる活動は、外交官引退後のこのイングラド帰国後に本格化した。

一八九一年、イギリスでロンドン日本協会(The Japan Society, London)が設立される。その設立趣意書に、「日本協会の目的は、日本の言語や文学、歴史、*folklore*、芸術、科学、産業、さらに過去から現在にわたる日本人の社会生活や経済状況、その他すべての日本に関わる事柄についての研究の奨励にある」(anon. 1893: vi)と書かれているように、この会の研究課題には *folklore* がしっかりと含まれていた。日本アジア協会が日本在住のジャパノロジストが集うコミュニティであつたように、ロンドン日本協会はイギリス在住者のジャパノロジストが集う重要なコミュニティとなつた。もちろん、それはイギリスに限らず海外会員も受け入れており、日本在住のジャパノロジストといえばサトウなどもこの会に加わり、副会長に就任していた。そしてこの会に、アストンもまた、チェンバレンとともに名譽会員として加わつたのである。そして、そこでの活動が、まず *folklore* に関心を持つ人々のコミュニティで紹介された。

アストンは一八九六(明治二九)年、ロンドン日本協会の機関誌の附録一の一巻と二巻で、『日本書紀』の翻訳「日本紀」(Nihongi)を連続発表した(Aston 1896)。総計四四三頁にわたる労作は、巻末索引も備えるなど世界の神話の比較研究に関心を持つフォークロリストたちにとって、まさに一級の資料となつたことであろう。その一巻に関する

る書評が、同年発行のイギリス民俗学会の機関誌 *Folklore* 七巻四号に掲載された(anon. 1896a)。その書評子は、「本の刊行によりロンドン日本協会は、多くの協会員以外からも感謝された。日出する国 [Sunrise land] 日本——引用者注」の人々の国民性や文学、伝統を知りわたらせるために、さらに多くの同様の書物が西洋社会へと提供されることを、私は望む」(anon. 1896a: 389)と締めくくつていふことから、当時、日本文化の紹介に大きな期待が寄せられていたことが分かる。「日本紀」(Nihongi)の二巻目もまた、翌年発行の *Folklore* 八巻三号で書評(anon. 1897)されるなど、彼の作品は高く評価されている。

これをきっかけとして、彼はイギリス民俗学会を知的活動の場の一つとして選び、論考を発表し、イギリスの *folklore* をめぐる人々のコミュニティにも加わるようになる。一八九九年には「日本神話」(Japanese Myth) (Aston 1899)を *Folklore* 一〇巻三号誌上で発表。それは、まさにイギリスにおける日本神話研究の最先端を行くものであつた。アストンは、当時のヨーロッパにおける日本の神話研究や神道研究の第一人者であつたが、その研究のなかに *folklore* の概念が活かされていくことには注目しておいてもよからう。彼は一九〇五(明治三八)年に「神道——神の道」(Shinto: The Way of Gods) (Aston 1905)を刊行する。それは三九〇頁にわたつて日本の神道や神話を「分析」した書物である。神道の総論から細部にまで言及した当時の一級の資料であるが、同書が特徴的なのは、日本の神道の単なる紹介にとどまらず、当時有数の *folklore* 研究者であつたタイラーやフレイザーらの先行研究を引きながら世界各国の *folklore* との比較分析を所々で試みている点である。それは、当時数多く出されていた日本文化の単なる紹介本、解説書ではなく、*folklore* の学術書にまで高められているのである。同書の索引では *Folklore* という語の出現箇所が一所のみ記載されているが、実際は他に八か所ほどあり、「European *folklore*」などと世界各国との比較対照時に多く用いられている。それはアストンが、当時イギリスで展開されていた世界的な *folklore* 研究の成果を積極的に吸収し、自らのジャパノロジーに応用していったことの証左となる。

一九〇六年、アストンは日本の文書にある印鑑の代わりの「手形」に関する小文を *Folklore* の通信欄に寄せ

1906)、その後、逝去した翌年の一九二二年には「日本の呪術」(Japanese Magic) (Aston 1912) という彼の遺作が *Folklore* 誌上を飾った。それは五月一五日のイギリス民俗学会の例会で死後代読された原稿をもとにしており、特段の配慮がなされたものと推察される。

以上のように、一九世紀末、日本で展開されたジャパノロジ、そしてそれを担ったジャパノロジストたちへの *folklore* という用語と概念の浸透について、書物のなかでの実際の使用例、およびイギリス民俗学会での活動例をもとに検討した。そこで明らかになったように、ジャパノロジには、*folklore* へのまなざしが深く根差していた。もちろん、ジャパノロジストたちは、狭く「民俗学」だけに携わっていたわけではない。先述のフォンデスと同じく、学問が未分化の時代に、人類学や地理学、東洋学といった重なり合う好古学的な知的営為に広く関わっていたのである。「民俗学」はその一つに過ぎない。

たとえばチェンバレンなどは、*folklore* の専門雑誌に執筆した同時代に、イギリスの地理学会などで研究発表を行っており、人類学会での発表数はイギリス民俗学会での発表数より多い(楠家 一九八六:七二一-七二六)。彼らは、当然自らをフォークロリストとして意識することは、ほとんどなかったことであろう。

とはいえ、一九世紀中葉にイギリスで誕生したその概念と用語が、数十年間のうちに遠く離れた日本の文化を読み取る視角として発展し、ジャパノロジストたちに浸透していたことは間違いない。そして、同時にイギリスで発展を遂げていた *folklore* をめぐる活動もまた、日本を射程に収めていた。それは *folklore* 概念を受容したジャパノロジストたちのみならず、その他多くの来日知識人、旅行者などが、多くの得がたい新情報、新資料を当時のイギリスにもたらしたためであった。一八七八(明治一)に来日して日本を旅行したイザベラ・ルーシー・バード (Isabella Lucy Bird) の旅行記『日本奥地紀行』(*Unbeaten Tracks in Japan*) (Bird 1880) や、一八九〇(明治三)に日本に帰化して小泉八雲となったパトリック・ラフカディオ・ハーン (Patrick Lafcadio Hearn) の文章なども、イギリスやアメリカの民俗学会の例会の場や機関誌上で言及され、また資料として用いられていたのである (Russell 1880; anon. 1896b)。

## 七、おわりに——日本におけるイギリス民俗学の終焉

一九世紀中頃に、イギリスにおいて誕生した *folklore* という概念と用語、そしてそれへのまなざし。それは階級対立や民族対立といった社会状況のなかでポリテイカルな意味合いを持たされていた。一方、それは好事家たちの好奇心をくすぐり、好古学という混沌とした知の営為のなかで生まれ、そして楽しまれていた。その用語を契機に、そしてそれを背景にさまざまな思惑のもと *folklore* を発見し、収集し、記録する知的営為がイギリスにおいて活発化した。その営為はイングランドやアイルランドを対象として展開される場合、「我々」というアイデンティティを階級的、民族的に鼓舞し、種々の政治運動を突き動かした自己表象となった。一方で他の国家や地域を対象として展開される場合、自らの西洋社会・文化の優越性を認識させ、また西洋社会から失われた、かつての美しく高貴なる野蛮状況を幻想させる進化的社会観を補強してくれる他者表象ともなった。そこに、植民地主義や帝国主義、そしてオリエンタリズムの極端を読み取ることも、それほど難しくはない。

しかし、そのような一九世紀末の政治や社会、学問状況を前提としながらも、そこで「日本」の *folklore* が、イギリスでこのほか関心をもたれ、また実際にその *folklore* が積極的に発見され、収集され、記録されていたことに、私たちはもう一度思いを馳せる必要がある。日本の「民俗学」が成立する以前に、いかなる形であれイギリスの「民俗学」が展開する場として「日本」が選ばれていたのである。そして「民俗」以前に、*folklore* として日本文化が掘り取られていた。日本における「民俗学」史を世界的潮流のなかに再定置するならば、いまの日本民俗学成立以前に、そこに別の「民俗学」があったことを私たちは受け入れるべきである。もちろん、同じ時代に同様の状況が、日本に限らずインドや中国、東南アジア諸国、そしてアフリカ諸国などの非・西洋社会全般に現出していたことは推測に難くなく、日本だけを特殊視してはならないことは当然である。



1921. Yanagita, K., Esq., 262 Chomi, Kaga Cho, Ushigome, Tokyo,  
Japan, per Gordon & Gotch, 15 St. Bride St., E.C.  
1927. Velts Major W. Perceval Junior United Service Club London

写真 98 1921年のイギリス民俗学会会員名簿に記載された柳田国男（東京大学総合図書館所蔵 原 1921:xより転載）

一九世紀末、イギリスにおいてアームチェア・フォークロリストたちが、日本からもたらされる新聞や書誌を情報源としてfolkloreを発見し、収集し、記録していた。また、同じ時代にイギリス在住の日本人留学生や日本在住のイギリス人が、folkloreを考究する「学会」コミュニティに偶然にも参画した。そして、folkloreの語を用いてイギリスと日本の両国で、日本文化が考究されていた。さらに同じ時代より広範なジャパノロジーのなかにfolklore概念が忍び込み、ジャパノロジストたちのなかにフィールドワークを行って直接folkloreを採集した人々を少なからず輩出した。そして、日本在住の彼らのネットワークは、イギリスの「民俗学」と緊密につながり、さらにアメリカなど他の欧米の「民俗学」のコミュニティともつながっていた。そこには、現在以上のfolkloreをめぐる知識や情報の東西の流通——方向的ではあったが——があった。ただ、その流通を担い、統治していたのはイギリスを中心とする西洋人であり、日本人の姿はそこには希薄であった。しかしそれでも、そこ日本にイギリス「民俗学」が存在していたことを認め、正当に位置づけるべきである。

それは、確かにいまの日本の「民俗学」、あるいは柳田国男が構築した民俗学とは、直接の系譜関係にはない。しかし、遅れて二〇世紀に入るとイギリスの「民俗学」から南方熊楠も知見を吸収し——彼らは当時のイギリスにおけるfolkloreのコミュニティでは無名であったが——、柳田とは異なる民俗学を混沌としながらも形作った。また日本の「民俗学」前史、あるいは第一段階とも捉えうる研究を行った坪井正五郎も、その留学中に民俗学の国際会議に出席したり、イギリス民俗学会の機関誌を母校に送ったりするなど、イギリスにおいてfolkloreという言葉と概念に接触していたことは、すでに述べたとおりである。

ただ坪井は、その後、「欧米研究者による日本研究に反発を感じながらも、自らが研究の客体であることを認めざるを得ない状況」（坂野 二〇〇五:三八）のなか、屈折しながらドメスティックな対抗的人類学の構築を目指してい

た。そして、このドメスティック人類学に柳田も加わりつつ、のちに離反し、さらに屈折しながらドメスティックな対抗的民俗学を作り上げていった。このような歴史から考えると、一九世紀末にいち早く日本を客体化したイギリス「民俗学」は、柳田国男が構築した民俗学にも、やはり見過ごせない影を落としているのである——ちなみに、柳田も一九二一年にイギリス民俗学会会員になっている——。

そして何よりも、一九世紀末のfolkloreを含み込んだジャパノロジーを担っていた「外国人研究者の影響を受けながら、それまでは存在しなかった『日本』」という意識と枠組みが登場して来た（岩田 一九九八:二四六—二四七）ことには注意を要するであろう。これまでの日本の「民俗学」が異様なまでに執着してきた「日本」という研究対象地域の輪郭線が、このころイギリス人が日本で取り組んでいたジャパノロジーやfolkloreに刺激され、浮かび上がらされたとも考えられるのである。

そのように考えると、日本の「民俗学」の学史を俯瞰するうえで、日本近世の民俗考証学としての「民俗学」から直線的にいまの日本の「民俗学」の来歴を説き起こすだけでは事足りないことは明らかである。日本では、連続性を含意する「系譜」ではなく、多様ないくつもの「民俗学」の群れが入り乱れながら生起し、互いに影響を与えつつ、そして断絶しつつ栄枯盛衰の道を歩んできた。そのいくつもの「民俗学」たちの一つとして、一九世紀末のイギリス「民俗学」があったのであり、日本の「民俗学」史において、その存在を正しく認知し、その花開いた一九世紀末を日本でイギリス「民俗学」が先行展開していた時代として画定すべきである。

その一八七〇年代から一九〇〇年代の時代が、エリック・ジョン・アーネスト・ホブズボウム (Eric John Ernest Hobsbawm) が鮮やかに描いてみせた、ヨーロッパにおける「伝統の大量生産」(ホブズボウム 一九九二:四〇七)の時代(一八七〇—一九一四年)、すなわち「創られた伝統」の時代と重なり合っていたことは偶然ではなからう。folkloreという言葉、概念自体が伝統の発明の過程で利用されていたのである。

イギリス「民俗学」が日本で展開していた時代は、このわずか三〇年間ほどに過ぎない。しかも、その時代の日本

「民俗学」の担い手のほとんどがネイティブ日本人ではなく、西洋人であるという特殊な状況下にあった。しかし、いいかえるならばその時代は、日本の「民俗学」史上、日本の民俗が西洋人によってもっとも関心を持たれ、好んで発見され、先を争って収集され、嬉嬉として記録され、熱く議論されていた時代だったともいえるのである。それは、西洋人の眼から日本が「眺められ」、西洋人の手で日本が「描かれ」、そして西洋人の言葉で日本が「語られ」た時代であった。

その後、日本文化の新奇性が薄れ、また日本の欧化が進展し、日本の帝国主義、覇権主義、ナショナリズムが台頭して西洋人の日本（人）観が悪化するなか（橋家 一九八六・二七三）、西洋人が日本の民俗を語り描くことは、徐々に下火となっていくた。

日本におけるイギリス「民俗学」の終焉である。

#### 謝辞

本稿の作成にあたり、ケンブリッジ大学図書館日本部・小山騰氏、東京大学東洋文化研究所・馬場紀寿氏、ロンドン大学東洋アフリカ研究学院(SOAS)・Gaynor Sekimori氏に、多くの貴重な情報とご教示を賜った。その学恩に対し、ここに深く感謝申し上げる。なお本研究はJSPS科研費二五二八四一七二、五〇二二三三八の助成を受けた。

#### 註

\*1 多様な「民俗学」観の必要性を説く菊地暁が、「柳田中心史観、純粹民俗学中心史観、東京教育大中心史観」「中略」、そういった一連の偏向をとまなう学史叙述は、結果的に、地方や隣接分野における実践を脱落させることにつながった」（菊地二〇一三・五二）と述べるように、これまでの「民俗学」の学史の叙述には偏りが見られる。その点において、「民俗学」の学史はさらに多様に叙述される余地を多く残している。

\*2 岩田重則は、一八世紀末の天明年間を嚆矢として、一八六七年に江戸幕府が瓦解するまでの時期、すなわち「幕藩体制が動揺し、新しい近代社会への動きが活発になって来る時期に、フィールドワークと民俗誌の原型（民俗的認識に基づいた観察と記録）と、体系的な民俗学の分析の原型（民俗の考証）が、日本社会の中からおおむね自生的に発達して来た」（岩田 一九九八・二四四）としている。

\*3 本論では一八〇一年に、グレートブリテン王国とアイルランド王国が合同し、一九二二年にアイルランドが自由国として分離独立するまでの「グレートブリテン及びアイルランド連合王国」を、通称して「イギリス」と表記する。

\*4 ただし、「民間伝承論」（一九三四）や『郷土生活の研究法』（一九三五）を出版し、民俗学を徐々に足固めする時分にもなるとそのフレイザーへの関心は薄まるどころか、むしろそれへ否定的なまなざしを向けることになる。この点については、佐伯有清によって、柳田の「一国民俗学の確立」つまり日本民俗学の樹立の過程で、当初情熱をもって吸収していたフレイザーの言説を、徐々に批判的に取り扱うようになる推移が指摘されている（佐伯 一九八八・一八六―二一五）。

\*5 それは、アメリカ民俗学でも同様であった。一八八八年に創刊された、アメリカ民俗学会の機関誌 *The Journal of American Folklore* の創刊号では、アメリカ民俗学会の創立目的を「急速に消滅しているアメリカの民俗の残骸を収集するため」(For the collection of the fast-vanishing remains of Folk-Lore in America) としている (anon. 1888: 3)。近代化のなかで失われる「残骸」(remains) に価値を見出し、それを考究する学問としてアメリカ民俗学も生じたのである。

\*6 民俗学 (folklore) の発祥の地、揺籃の地を自負するためか、イギリス民俗学会は「The Folklore Society」と、その学会名に定冠詞を付すだけで、国名を付していない。The Folklore Society は、日本語では「民俗学協会」や「イギリス民俗学協会」と訳出されることもあるが、本論では「イギリス民俗学会」と表記する。

\*7 本稿では、著者名不記載で著者が不明の論考の場合、書誌情報の記載上、著者名を anonymous の省略である anon. と表記する。

\*8 アイルランド、および北アイルランドを含む九つの州の北部地方。

\*9 Online Index of 'Notes and Queries' ([https://docs.google.com/document/d/1-Dzr9fo\\_yFAA\\_twuQB6Osk0YqzTIXRCvir\\_](https://docs.google.com/document/d/1-Dzr9fo_yFAA_twuQB6Osk0YqzTIXRCvir_)

- \* 10 RICORSO William Patterson ([http://www.ricorso.net/rx/az-data/authors/p/Patterson\\_W/ife.htm](http://www.ricorso.net/rx/az-data/authors/p/Patterson_W/ife.htm) 二〇一五年八月八日閲覧)。  
\* 11 同上。
- \* 12 イングランド支配前の古代文化への回帰運動。いわゆるアイルランドやスコットランドなどの土着文化の復興を目指す文芸運動であり、かつ独立を目指す政治運動でもあった。
- \* 13 \* 10に同じ。
- \* 14 志村真幸によると、チェンバレンやアーネスト・サトウら当時の著名なイギリス系ジャパノロジストたちの「ブーツ・アンド・クエリーズ」への投稿は確認されていない。
- \* 15 長州藩出身で同時代にドイツ留学し、その後、毛織物産業を日本で殖産した井上省三(いのうえしやうぞう)と漢字表記上同姓同名であるが、本論で対象とする人物は「いのうえせいぞう」である。なお、本論におけるイギリス民俗学会会員名簿上の日本人の井上省三への比定は、ケンブリッジ大学図書館日本部長・小山騰氏のご教示による。
- \* 16 井上省三の自筆履歴書では、一八七五年に University College School (入学)、同年一〇月に University College London (進学)した旨が書かれているが、学生名簿上は帰国する七九年まで University College School の学生として記載されている。なお、イギリス民俗学会会員名簿にある「Count」(伯爵)という称号が付された理由は不明である。当時の日本には爵位はなく、随行した蜂須賀茂朝も当時はまだ爵位を持っていないが、彼との関係で付された可能性もある。また、井上がイギリス民俗学会へ加入した背景に、この蜂須賀の何らかの関与、影響があった可能性も否定できない。
- \* 17 一八六二年刊『英和對譯袖珍辭書』(堀達之助著、徳川幕府洋書調所)や、一八六四年刊のアメリカの辞書を翻訳した一八八八年刊『和訳字彙——ウェブスター氏新刊大辞書』(イーストレイキ、棚橋一郎訳、三省堂)にはfolkloreの文字は収録されていない。この井上校閲の『和訳英字彙——附音插图』は、日本の英和辞典のなかでfolkloreの文字を収録した初期のものである。なお、一九〇二年刊『新訳英和辞典』(神田乃武等編、三省堂)には、Folkloreの語が収録され、「①民俗学〔民俗ノ伝説、信仰、慣習等を研究スルモノ〕②民俗ノ伝説、信仰及ビ慣習、俗伝』(四〇二頁)と解説されている。ちなみに、井上十吉の一九〇九年刊『新訳和英辞典』(三省堂)にはfolkloreの語は見当たらない。
- \* 18 ホッキングによると、Poundesの本来の姓はPoundsであったという。彼は来日後、重井鉄之助という日本名を与えられた。それは、Poundsという姓が「重」を連想させ、さらにその「重」が「鉄」を連想させたためである。そして、フォンデスがこの「鉄」の化学記号Feを、自らの本来の姓のPoundsに入れ込んだのが、新しい姓のPoundesなのである。それは「パウンス」と発音されていたという(Bocking 2013)。またホッキングは、カタカナでは「フォンデス」と表記しているが、本稿では日本の宗教学研究、また明治時代の文献などで多用されている「フォンデス」の表記を採用する。
- \* 19 イギリスの海軍軍医将校で、日本文学者。百人一首や『竹取物語』の英訳を行った。一八六四〜六六年、一八七二〜七九年の二期にわたって滞日。南方熊楠と『方丈記』を英訳したことも有名である。
- \* 20 この文章の一部は、『ブーツ・アンド・クエリーズ』にも同様に掲載された。同誌の一八七九年一月二十九日号の末尾には、出版会社 Griffith & Farran 社のブック・カタログが載せられたが、その「Folkloreの主要業績」(Important Works on Folklore)として、その広告記事が掲載されている。
- \* 21 イギリス民俗学会の第一回年次大会(この)で開かれており、イギリス民俗学会と王立アジア協会との密接な関係が推察できる。
- \* 22 The Project Gutenberg eBook (<http://www.gutenberg.org/files/13015/13015-h/13015-h.htm> 二〇一五年一月二五日閲覧)。
- \* 23 The Folk-Lore Journal 掲載論考 (Aino Folk-Lore) 及び Aino Folk-Tales を対照した結果 Aino Folk-Lore は一〇話が削除されたことが判明した。それら削除された口頭文芸は、性行為の描写や、獣姦を連想させる内容であった。
- \* 24 Internet Sacred Text Archive (<http://www.sacred-texts.com/shi/sad/index.htm> 二〇一五年一月二五日閲覧)。
- \* 25 この発表は、実はチェンバレンの代読によるものであった(楠家 一九八六:七二三)。
- \* 26 日本アジア協会が設立された翌年の一八七三(明治六)年には、「ドイツ東洋文化研究協会」(Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens)——Völkerkunde (民族学)の文字が見えなくなっているに注意——が日本で設立され、ドイツ系

のジャパノロジストたちも活動を活発化させていた。これにはサトウも加入し、また機関誌の交換を日本アジア協会と行うなど、国籍を越えた交流も行われていたのである。ドイツの *Volkerkunde* および *Volkkunde* のまなざしが、どのように日本に向けられていたのかという問題は、今後の課題としたい。

\* 27 パーアの *Unbeaten Tracks in Japan* から、北枕や狐憑きの話が、*The Folk-Lore Record* 三巻二号の Notes 欄に引用されている (Russell 1880)。この旅行記は、素朴な異文化表象の難点を含みつつも、当時、フォークロリストのあいだで日本の民俗を知るために大いに活用されていた。

\* 28 本稿の脱稿後、ケンブリッジ大学図書館日本部・小山騰氏に草稿をご笑覧いただくなかで、下記のようなご教示を賜った。

「興味を持ったことは、柳田國男が『石神問答』を出版した際、アストンに寄贈している点です。アストンの蔵書のなかには『アストン先生三奉る 柳田國男』という書き込みがある『石神問答』があります。柳田國男がアストンと自分の最初の本を贈呈する関係にあったとはまったく気がつきませんでした。チェンバレンについては柳田國男が書いているのでわかっています。アストンのことは知りませんでした。やはり当時柳田國男はアストンやチェンバレンなどのジャパノロジストのバイオニアなどとなんらかの関係があったのでしょうか(小山騰氏私信、二〇一五年八月一九日)。

小山氏は、ジャパノロジストの蔵書目録復刻版の解説作成作業の過程で、一九二一(明治四四)年にケンブリッジ大学が収蔵したアストン・コレクションのなかから、柳田がアストンに謹呈した『石神問答』(一九一〇年刊)を発見している。その内表紙にはアストンの蔵書番号一〇六五とともに、柳田の直筆と思われる「アストン先生三奉る 柳田國男」の文字があった。小山氏が指摘するように、柳田が独自の民俗学を打ち立てる以前に、ジャパノロジストたちとの交流があったこと、あるいはジャパノロジストたちを意識していたことに注目しなければならないだろう。ちなみに、アストンは一八八九(明治二二)年には離日しており、柳田はイギリスへ『石神問答』を送り届けていたのである。それはアストンが世を去る間際のことであった。日本で

のイギリス「民俗学」の終焉とときを同じくして、日本「民俗学」が萌芽したのである。

さらに小山氏からは、当時の *folklore* との関連で「ちりめん本」(crepe paper books)の重要性についてご指摘いただいた。ちりめん本とは、和紙を絞って縮緬状にした図書で、英語やドイツ語、フランス語、スペイン語等の外国語で書かれ、当時来日した外国人の土産物に供されていた書物である。長谷川武次郎がこれを考案し、一八八五(明治一八)年から一八九二(明治二五)年まで、全二〇巻二二冊の『日本昔噺』(Japanese Fairy Tales)のシリーズを刊行している。この執筆者のなかに *folklore* と関わったチェンバレンやハーンなどのジャパノロジストたちが含まれていたことは注目に値する。たとえば、チェンバレンは一八八六(明治一九)年、*Japanese Fairy Tale Series* No. 8, 9 で「浦島」【八頭ノ大蛇(ヤマタノオロチ)】の英訳を行っている。彼らジャパノロジストたちの活動は、単に学究にとどまらず、*folklore* の商業的な客体化と脱文脈化——民俗学的にいうならばフォークロリズム——に、一役買っていたのである。

\* 29 柳田國男が、イギリス「民俗学」あるいはそれとつながっていたイギリスの人類学や民族学へ関心を寄せて、その知見を吸収していたことは、すでに指摘されている。その関心は、その蔵書(所蔵洋書)にあらわれている。長谷川邦男は、成城大学柳田國男文庫所蔵の一〇二タイトルの洋書のうち、分類統計上意味のある一〇二タイトルの蔵書構成の分析を行った。それによると、蔵書の出版年は一八二二年から一九六〇年までに及んでいるものの、とくに一九二一〜二五年出版のものもとても多いという。さらに出版地ではイギリスが最も多く(四六〇タイトル)、フランス(一四七タイトル)、アメリカ(二二八タイトル)、ドイツ(二二二タイトル)と続く。そして、著者別でいえばフレイザーが二〇タイトルと最も多く、次いでラング(一四タイトル)、セイバイン・ベアリングゴールド(Sabine Baring-Gould)イギリスの牧師・民俗学者、九タイトル)、ゴムム(九タイトル)、ロバート・ランオルフ・マレット(Robert Ranulph Marett)タイラーの弟子の民族学者、八タイトル)、ウィリアム・ホールズ・リヴァース・リヴァース(William Halse Rivers)イギリスの医師・人類学者・精神医学者で柳田がイギリス民俗学会に入会した当時の学会長、八タイトル)と、上位六人がすべてイギリスの民俗学・民族学・人類学関係者であった。この六人にセビオ(六タイトル)やヘネップ(六タイトル)、ボアズ(五タイトル)などが続く。なおタイラーに関しては、四タイ

トルが確認されている(長谷川 一九九六・五五―六二)。

参考文献

◎日本語

- 天野郁夫 二〇〇五『学歴の社会史―教育と日本の近代』平凡社。  
石井正己 二〇二二『雑誌『民間伝承』の国際性』ヨーゼフ・クライナー編『近代(日本意識)の成立―民俗学・民族学の貢献』一六六―一八二頁、東京堂出版。  
井上十吉 一九一五『井上英和大辞典』至誠堂書店。  
岩田重則 一九九八『日本民俗学の歴史と展開』福田アジオ・小松和彦編『民俗学の方法』(講座日本の民俗学一)、二三八―二六七頁、雄山閣。  
川村伸秀 二〇一三『坪井正五郎―日本で最初の人類学者』弘文堂。  
菊地暁 二〇一三『主な登場人物二―京大文化史学派の『先祖の話』受容』『日本民俗学』二七六、五二―六八頁。  
楠家重敏 一九九七『日本アジア協会の研究―ジャバノロジ―ことはじめ』日本図書刊行会。  
―― 一九八六『ネズミはまだ生きています―チェンバレンの伝記』雄松堂出版。  
―― 二〇〇五『W・G・アストン―日本と朝鮮を結ぶ学者外交官』雄松堂出版。  
栗原晶江 二〇〇八『境界線におけるW・B・イエイツ―『The Lake Isle of Innisfree』分析』『東京成徳大学人文学部研究紀要』一五、一九―二七頁。  
桑山敬己 二〇〇八『ネイティブの人類学と民俗学―知の世界システムと日本』弘文堂。  
甲元眞之 一九九〇『ゴムの方法論』『国立歴史民俗博物館研究報告』二七、九―一三頁。  
佐伯有清 一九八八『柳田国男と古代史』吉川弘文館。

坂野徹 二〇〇五『帝国日本と人類学者―一八八四―一九二二年』勁草書房。

佐光昭二 二〇〇七『阿波洋学史の研究』徳島県教育印刷。

島田豊纂訳 一八八八『和訳英字彙―附音插图』大倉書店。

志村哲也 二〇〇三『ヘルダーの『民謡集』と民謡論―最近のヘルダー研究の側面』『上智大学ドイツ文学論集』四〇、一三九―一六九頁。

志村真幸 二〇〇九『南方熊楠と『フーツ・アンド・クエリーズ』誌―Footprints and Gods, &c. から』『ダイダラハウシの足跡』へ』『ヴィクトリア朝文化研究』七、六八―八八頁。

―― 二〇一〇 a 『フーツ・アンド・クエリーズ』誌と大辞典の時代―『オックスフォード英語大辞典』、『イギリス人名事典』、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』と南方熊楠』『歴史文化社会論講座紀要』八、八九―一〇四頁。

―― 二〇一〇 b 『フーツ・アンド・クエリーズ』誌掲載論文の中のアジア』『アジア遊学』一四四、一〇九―一七頁。

―― 二〇二二『フーツ・アンド・クエリーズ』誌のなかの日本―南方熊楠と日本関連論考』『歴史文化社会論講座紀要』九、二九―四六頁。

菅豊 二〇〇八『環境民俗学は所有と利用をどう考えるか?』山泰幸・川田牧人・古川彰編『環境民俗学―新しいフィールド学へ』一〇九―一三五頁、昭和堂。

―― 二〇二二『民俗学の悲劇―アカデミック民俗学の世界史的展望から』『東洋文化』九三、三一―五三頁。

関敬吾 一九六〇『ヨーロッパ民俗学の成立と概観』大間知篤三他編『民俗学の成立と展開』(日本民俗学大系一)、三四三頁、平凡社。

曾我部一行・及川祥平・今野大輔 二〇〇七『人類学雑誌』考―民俗学の揺籃期』『成城文藝』二〇一、一一九―一七二頁。

塚田秀雄 二〇一四『カール・フォン・リンネの地域誌―『スコネ旅行』に描かれた自然・経済・文化』古今書院。

鶴見太郎 一九九八『柳田国男とその弟子たち―民俗学を学ぶマルクス主義者』人文書院。

トレヴァー・ローパー、ヒュー 一九九二『伝統の捏造―スコットランド高地の伝統』エリック・ホブズボウム、テレンス・レン

ジャー編『創られた伝統』前川啓治・梶原景昭他訳、二九―七二頁、紀伊國屋書店。  
中川かず子 二〇〇八「ジェームス・サマーズ——日本研究者、教育者としての再評価」『北海学園大学人文論集』四一、九五―一二三頁。

日本英雄傳編纂所 菊池寛監修 一九三六『日本英雄伝一』非凡閣。

長谷川邦男 一九九六「柳田国男とイギリス民俗学の系譜Ⅰ——柳田国男の読書と蔵書・予備調査」柳田国男研究会編『柳田国男・

ジュネーブ以後』五一―六二頁、三一書房。

廣田龍平 二〇一五「欧米圏における初期妖怪言説について——ファウンズ『扶桑耳袋』を中心として」『世間話研究』二三、四一―  
六三頁。

フォンデス述 一八九三『普氏仏教演説集』内宮虎助編纂、興文堂。

福田アジオ 二〇〇九『日本の民俗学——「野」の学問の二〇〇年』吉川弘文館。

ホブズボウム、エリック 一九九二「伝統の大量生産——ヨーロッパ、一八七〇―一九一四」エリック・ホブズボウム、テレンス・

レンジャー編『創られた伝統』前川啓治・梶原景昭他訳、四〇七―四七〇頁、紀伊國屋書店。

丸山学 一九六〇「イギリスの民俗学の歴史と現状」大間知篤三他編『民俗学の成立と展開』(日本民俗学大系二)、四五―五五頁、平凡社。

箕作元八 一九一七「故菊池大麓男」『太陽』二三(二)、一五八―一六一頁。

モース、ロナルド 一九七六「柳田民俗学のイギリス起源」『展望』二二〇、一六一―二一九頁。

モルガン、プリス 一九九二「死から展望へ——ロマン主義時代におけるウェールズの過去の探究」エリック・ホブズボウム、テレ

ンス・レンジャー編『創られた伝統』前川啓治・梶原景昭他訳、七三一―六一頁、紀伊國屋書店。

柳田国男 一九三四「民間伝承論」共立社(なお本稿では伝統と現代社刊(一九八〇)に依った)。

—— 一九三五『郷土生活の研究法』刀江書院。

◎英語

Akai, Toshio 2009. Theosophical Accounts in Japanese Buddhist Publications of the Late Nineteenth Century. An Introduction and

Select Bibliography. *Japanese Religions* 34 (2): 187-208.

Alcock, Rutherford 1863. *The Capital of the Tycoon: A Narrative of a Three Years' Residence in Japan*. New York: Harper & brothers.

anon. 1849. Preface. *Transactions of the Kilbenny Archaeological Society* 1 (1): xiii-xv.

anon. 1853. The Ossianic Society. *Transactions of the Kilbenny Archaeological Society* 2 (2): 1-3.

anon. 1856. General Rules. *Transactions of Ossianic Society* 4: ii.

anon. 1878a. Rules. *The Folk-Lore Record* 1: viii-ix.

anon. 1878b. Front Matter. *The Folk-Lore Record* 1: iii-vii.

anon. 1879. Notices and News. *The Folk-Lore Record* 2: 218, 228-232.

anon. 1880a. Second Annual Report of the Council. *The Folk-Lore Record* 3 (2): 1-12.

anon. 1880b. Misuse of Japanese Art. *The Art Amateur* 4 (1): 19.

anon. 1881. Third Annual Report of the Council. *The Folk-Lore Record* 4: 205-223.

anon. 1888. On the Field and Work of a Journal of American Folklore. *Journal of American Folklore* 1 (1): 3-7.

anon. 1891. The International Folk-Lore Congress. 1891. *Folklore* 2 (3): 373-380.

anon. 1892. Local Meetings and Other Notices. *Journal of American Folklore* 5 (17): 155-165.

anon. 1893. Prospectus. *Transactions and Proceedings of the Japan Society, London* 1: vi-vii.

anon. 1896a. Review. *Folklore* 7 (4): 387-389.

anon. 1896b. Local Meetings and Other Notices. *Journal of American Folklore* 9 (32): 72-75.

anon. 1897. Review. *Folklore* 8 (3): 266.

anon. 1921. Front Matter (Members). *Folklore* 32 (1): i-xvi.

- Aston, William George. 1896. Nihongi: Chronicles of Japan from the Earliest Times to A.D. 697. *Transactions and Proceedings of the Japan Society, London*. Supplement I. London: Kegan Paul, Trench, Tribner & Co.
- 1899. Japanese Myth. *Folklore* 10 (3): 294-324.
- 1905. Shinto: *The Way of Gods*. London: Longmans, Green & Co.
- 1906. Hand Impressions Instead of Seals. *Folklore* 17 (1): 113-114.
- 1912. Japanese Magic. *Folklore* 23 (2): 185-196.
- Batchelor, John 1888a. Specimens of Aino Folk-Lore. *The Folklore Journal* 6 (3): 193-196.
- 1888b. Specimens of Aino Folk-lore. *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 16 (2): 111-154.
- 1890. Specimens of Aino Folk-lore. *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 18 (1): 25-85.
- 1892. *The Ainu of Japan: The Religion, Superstitions, and General History of the Hairy Aborigines of Japan*. London: Religious Tract Society.
- 1893. Specimens of Aino Folk-lore. *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 20 (2): 216-227.
- 1894. Items of Aino Folk-Lore. *Journal of American Folklore* 7 (24): 15-44.
- 1901. *The Ainu and Their Folk-lore*. London: Religious Tract Society.
- Bird, Isabella Lucy. 1880. *Unbeaten Tracks in Japan: The Firsthand Experiences of a British Woman in Outback Japan in 1878*. London: John Murray.
- Bocking, Brian. 2013. Flagging Up Buddhism: Charles Proudes (Omioie Tetzunostzuke) Among the International Congresses and Expositions, 1893-1905. *Contemporary Buddhism* 14 (1): 17-37.
- Bocking, Brian, Laurence Cox and Yoshinaga Shin'ichi. 2014. The First Buddhist Mission to the West: Charles Proudes and the London Buddhist Mission of 1889-1892. *Diskus* 16(3): 1-33.
- Burton, William Kinnimmond 1895. *Wrestlers and Wrestling in Japan*. Tokyo: K. Ogawa.
- Chamberlain, Basil Hall 1888a. Aino Folk-Lore. *The Folk-Lore Journal* 6(1): 1-51.
- 1888b. *Aino Folk-Tales*. (Privately printed for the Folk-lore Society, London).
- 1890. *Things Japanese: Being Notes on Various Subjects Connected with Japan, for the Use of Travellers and Others*. London: Kegan Paul, Trench, Tribner & Co.; Tokyo: Hakubunsha.
- 1891. *Things Japanese: Being Notes on Various Subjects Connected with Japan, for the Use of Travellers and Others* (2nd ed. revised and enlarged). London: Kegan Paul, Trench, Tribner & Co.
- 1902. *Things Japanese: Being Notes on Various Subjects Connected with Japan, for the Use of Travellers and Others* (4th ed. revised and enlarged). London: Kelly & Walsh.
- 1905. *Things Japanese: Being Notes on Various Subjects Connected with Japan, for the Use of Travellers and Others* (5th ed. revised). London: Kelly & Walsh.
- Cooze, Henry Charles and Nicholas O'Kearney. 1879. The Story of Conn-Edda. Or, the Golden Apples of Lough Erne. *The Folk-Lore Record* 2: 180-193.
- Emrich, Duncan. 1946. "Folk-Lore": William John Thoms. *California Folklore Quarterly* 5(4): 355-374.
- Freeman-Mitford, Algernon Berran. 1871. *Tales of Old Japan*. London: Macmillan.
- Griffis, William Elliot. 1892. *Japan in History, Folklore and Art*. Boston: Houghton, Mifflin & Co.
- Inouye, Jukichi. 1895a. *The Japan-China War: Naval Battle of Haiyang*. Yokohama: Kelly & Walsh.
- 1895b. *Sketches of Tokyo Life*. Yokohama: Torando.
- 1900. Recent Books on Japan. *The Atlantic Monthly* 86 (515): 399-409.
- 1911. *Home Life in Tokyo*. Tokyo: Tokyo Printing Company.





資料9・1 関連年表

国名略…A…アメリカ、F…フランス、G…ドイツ、N…オランダ、R…ロシア、S…スウェーデン、I…イギリス併合されていた  
 アイランド地域、Z…スイス  
 雑誌名略：N&Q (Notes and Queries) / FLR (The Folk-Lore Record) / FLJ (The Folk-Lore Journal) / FOL (Folklore)  
 TAJ (Transactions of the Asiatic Society of Japan) / JAE (Journal of American Folklore) / TJS (Transactions and  
 Proceedings of the Japan Society)

西暦	和暦	日本	事 項	イギリス	その他の海外
一七五一					リンネ「スコネ旅行」(S)
一七七一					ヘルダー「民謡」(volkslied) を造語 (G)
一七九五	寛政七	本居宣長「玉勝間」			
一八〇二	享和二				
一八〇一	享和元			グレートブリテン王国とアイルランド王国合併(実質、併合)	
一八〇四		屋代弘賢「風俗問状」調査			
一八一八	文化年間				
一八二二					グリム兄弟「グリム童話」(初版)
一八一五					
一八三〇	天保元	喜多村信節「嬉遊笑覧」			
一八三二				The Dublin Penny Journal 創刊 (I)	
一八四六				トムズ folk-lore を造語	
一八四八				二月革命	

一八四九				トムズN&Q創刊	
一八五三				オシアン協会設立、オカーニー「ガブラの戦い」(I)	
一八五五				N&Qに日本関連記事初出	オランダ・ライデン大学に世界最古の日本学科設立 (N)
一八五七					
一八五八	安政五	日本と五か国(イギリス、A、F、N、R)との間で修好通商条約を締結			
一八六二	文久二	サトウ来日		初代イギリス公使オールコックがロンドン万国博覧会に日本美術品を展示	
一八六三	文久三	フォンテス来日		オールコック「大君の都」	
一八六四	元治元	アストン来日		タイラーがfolkloreの語を使用	
一八六七	慶応三	サトウ、アストン、フリーマンニミットフォード阿波徳島藩訪問			日本が初めて国際博覧会(パリ万国博覧会)に参加 (F)
一八六八	明治元				マネ「エミール・ゾラの肖像」(F)
一八七〇	明治三	「ジャパン・ウィークリー・メール」創刊			
一八七一	明治四			フリーマンニミットフォード「古き日本の物語」	
一八七二	明治五	日本アジア協会設立		井上省三、蜂須賀茂韶に従い渡英	
一八七三	明治六	ドイツ東洋文化研究協会設立 チェンバレン来日		バターソン「日本の民俗」(I、N&Q)、イギリスで日本文化をfolkloreと表現 井上十吉渡英	
一八七四	明治七			菊池大麓、蜂須賀茂韶の助力を得る	

一八七五	明治八	柳田國男誕生 フォンテス「扶桑耳袋」、folkloreの語を日本で使用		
一八七六	明治九	フォンテス離日		
一八七七	明治一〇	パチエラー来日		
一八七八	明治一一	マッカーシー、フォンテス(名簿上は日本在住)イギリス民俗学大会	イギリス民俗学会設立、井上省三入会	
一八七九	明治一二	井上省三帰国	フォンテス「古き日本の民俗」出版 予告	
一八八〇	明治一三		フォンテス、イギリス民俗学会年次大会出席、日本美術史の講演	
一八八一	明治一四	坪井正五郎大学予備門卒業、東京大文学部入学	パード「日本奥地紀行」 一二月、フォンテス、イギリス民俗学会最後の参加、イギリス・アイルランド王立人類学協会機関誌に論考	
一八八三	明治一六	井上十吉帰国	フォンテス、イギリス民俗学会退会、イギリス・アイルランド王立人類学協会機関誌に論考	
一八八四	明治一七	井上十吉東京大学理学部実験助手 坪井正五郎ら、じんるいがくのとも人類学会設立		
一八八五	明治一八	長谷川武次郎「桃太郎」(ちりめん本「日本昔噺」シリーズ刊行開始、一八九二まで)		

一八八六	明治一九	坪井正五郎帝国大学理科大学卒業、大学院へ進学 東京人類学会設立、鳥居龍藏入会 チェンバレン「浦島」「八頭ノ大蛇」(ちりめん本「日本昔噺」シリーズ八、九号)	チェンバレン「アイヌの民俗」(FLJ)、「アイヌの昔話」 パチエラー「アイヌの民俗の標本」(FLJ) イエイツ「アイルランド農民のお伽噺と民話」(I)	南方熊楠渡米(A)
一八八八	明治二一	坪井正五郎、大学院研究科修了、帝国大学理科大学助手、鳥居龍藏と徳島で面会 パチエラー「アイヌの民俗の標本」(一回目)と題して日本アジア協会で発表、「アイヌの民俗の標本」(TAJ) 井上十吉英和辞書「和訳英字彙」(附音插图)でfolkloreの語の翻訳	チェンバレン「日本事物誌」初版(日) パチエラー「アイヌの民俗の標本」(一回目)と題して日本アジア協会で発表	アメリカ民俗学会設立(A)
一八八九	明治二二	パチエラー「アイヌの民俗の標本」(二回目)と題して日本アジア協会で発表 アストン離日	フォンテス、ロンドンで仏教海外宣教会結成 坪井正五郎渡英	第一回国際民俗学会議(万国フォークロア大会)開催(F)
一八九〇	明治二三		チェンバレン「日本事物誌」初版(日)でも出版 アストン来日	
一八九一	明治二四	井上省三死去	ロンドン日本協会設立 坪井正五郎第二回国際民俗学会議(万国フォークロア大会)出席、タイラーと出会う	

一九九二	明治二五	バチエラー「アイヌの民俗の標本」(三回目)と題して日本アジア協会で発表 坪井正五郎帰国、帝国大学理科大学教授就任 フォンテス、再来日	バチエラー「日本のアイヌ」 南方熊楠渡英	グリフィス「歴史、民俗、芸術のなかの日本」(A)
一九九三	明治二六	土俗会開催、帝国大学に人類学講座設置		
一九九四	明治二七			バチエラー「アイヌ民俗の種目」(A、JAE)
一九九五	明治二八	井上十吉「東京生活のスケッチ」		
一九九六	明治二九		アストン「日本紀」(TJS)	
一九九九	明治三二		アストン「日本紀」の書評(FOL)	
一九〇〇	明治三三	サトウ離日(一九〇六に清国より帰国時に日本に立ち寄る)	アストン「日本神話」(FOL)	
一九〇一	明治三五	南方熊楠帰国 日英同盟発効		
一九〇二	明治三六	南方熊楠N&Qへの最初の投稿		
一九〇三	明治三八		アストン「神道」	
一九〇四	明治三九		アストン「印鑑代わりの手形」(FOL)	
一九〇五	明治四〇	フォンテス死去	スミス「日本の昔話と民俗」 ゴナム「歴史科学としての民俗学」	
一九〇六	明治四一			
一九〇七	明治四二		アストン、柳田より「石神問答」を贈られる	
一九〇八	明治四二	柳田国男「後狩詞記」		
一九〇九	明治四三	柳田国男「石神問答」「遠野物語」		
一九一〇	明治四三			

一九一一	明治四四	井上十吉「東京の家庭生活」 上田敏イギリスのfolkloreという語内容に関し京都で講演 チェンバレン離日	アストン死去	
一九一二	大正元	坪井正五郎ら日本民俗学会設立	アストン「日本の呪術」(FOL)	
一九一三	大正二	『郷土研究』(一九一七まで) 坪井正五郎死去		柳田国男国際連盟委任統治委員に就任、ジュネーヴ滞在(二月帰国)(Z) 柳田国男、イギリス民俗学会入会 柳田国男再渡航、ジュネーヴ滞在(一九二三帰国)(Z)
一九二二	大正一一		アイルランド自由国独立(I)	
一九二五	大正一四	『民族』(一九二九まで)		
一九二九	昭和四	井上十吉死去	サトウ死去	
一九三四	昭和九	柳田国男「民間伝承論」 民間伝承の会設立		チェンバレン死去(Z)
一九三五	昭和一〇	『民間伝承』(一九五三まで、六人社刊は一九八三まで) 柳田国男「郷土生活の研究法」		
一九四〇	昭和一五	バチエラー離日		
一九四四	昭和一九		バチエラー死去	
一九四九	昭和二四	日本民俗学会設立		

■編者紹介

桑山敬己 (くわやま たかみ)

北海道大学大学院文学研究科教授。専門は文化人類学。

おもな著作に

*Native Anthropology* (Trans Pacific Press, 2004)

『ネイティブの人類学と民俗学』(弘文堂、2008年)

『よくわかる文化人類学(第2版)』(編著、ミネルヴァ書房、2010年)

『グローバル化時代をいかに生きるか』(共編、平凡社、2010年)など。

おもな訳書に

ヘンドリー『社会人類学入門』(法政大学出版局、2002年)など。

日本はどのように語られたか

—海外の文化人類学的・民俗学的日本研究

2016年3月31日 初版第1刷発行

編者 桑山敬己

発行者 杉田啓三

〒606-8224 京都市左京区北白川京大農学部前

発行所 株式会社 昭和堂

振替口座 01060-5-9347

TEL (075) 706-8818 / FAX (075) 706-8878

ホームページ <http://www.showado-kyoto.jp>

© 桑山敬己ほか 2016

印刷 モリモト印刷

ISBN978-4-8122-1534-0

\*乱丁・落丁本はお取り替えいたします。

Printed in Japan

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

■執筆者紹介

太田好信 (おた よしのぶ)

九州大学大学院比較社会文化研究院教授。専門は文化人類学、とくに文化理論史と先住民研究。おもな著作に『亡霊としての歴史』(人文書院、2008年)、『増補版 トランスポジションの思想』(世界思想社、2010年)、『政治的アイデンティティの人類学』(編著、昭和堂、2012年)など。

中西裕二 (なかにし ゆうじ)

日本女子大学人間社会学部教授。専門は文化人類学、民俗学。おもな著作に『憑依と呪いのエスノグラフィ―』(共著、岩田書院、2001年)、『“ネイティブの人類学”のもう一つの可能性——黒田俊雄と神仏習合の人類学的理解から』(『文化人類学』71巻2号、2006年)、『民間信仰における信仰と外部性』(『宗教研究』82巻2号、2008年)など。

ジェームス・E・ロバーソン

2016年4月より、金沢星稜大学人文学部国際文化学科教授。専門は文化人類学。おもな著作に“Doin’ Our Thing”: Identity and Colonial Modernity in Okinawan Rock Music (*Popular Music and Society* 34(5), 2011), Singing Diaspora: Okinawan Songs of Home, Departure and Return (*Identities: Global Studies in Culture and Power* 17(4), 2010), 『戦争記憶論』(分担執筆、昭和堂、2010年)など。

泉水英計 (せんすい ひでかず)

神奈川大学経営学部教授。専門は文化人類学。おもな著作に『植民地近代性の国際比較』(分担執筆、御茶の水書房、2013年)、『記憶と忘却のアジア』(分担執筆、青弓社、2015年)、『帝国を調べる』(分担執筆、勁草書房、2016年)など。

ハンス・D・オイルシュレーガー

ボン大学アジア・オリエント研究所上級講師。専門は現代日本研究。おもな著作に *Umwelt und Wirtschaft der Ainu* (Reimer, 1989), *Individualität und Egalität im gegenwärtigen Japan* (共著、Iudicium, 1994), *Beyond Ainu Studies* (分担執筆、University of Hawaii Press, 2013) など。

加藤恵津子 (かとう えつこ)

国際基督教大学教養学部教授。専門は文化人類学、ジェンダー研究、記号論。おもな著作に『「お茶」はなぜ女のものになったか』(紀伊國屋書店、2004年)、*The Tea Ceremony and Women's Empowerment in Modern Japan: Bodies Re-presenting the Past* (Routledge Curzon, 2004)、『「自分探し」の移民たち』(彩流社、2009年)など。